
ドラゴンクエスト? そして現実へ...

あちゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエスト？ そして現実へ…

【Nコード】

N6325X

【作者名】

あちゃ

【あらすじ】

DQ？の世界に『友と絆と男と女』のリユカが迷い込みました。チャライノリでなんとか生きて行く…そんなDQ？です。

ヌルい作品ではございますが、ご了承下さい。

今作品の前に私の「ドラゴンクエストV～友と絆と男と女」をお読み頂けると、より一層楽しんで頂けるはずです。

よろしくお願い致します。

プロローグ

<アリアハン>

「勇者オルテガの娘アルルよ、よく来た！面を上げよ」

ここはアリアハン城内、謁見の間。

玉座に座るアリアハン国王を前に、少女が一人傳いている。

少女の名は『アルル』

10年前、魔王バラモスを倒すべく一人旅立ち、火山で死亡した『オルテガ』の娘である。

「昨今、魔物の活動が活発になってきていると言う！世界を救う為、人々を救う為！そして志半ばで倒れた父オルテガの為、勇者アルルよ！魔王バラモスを成敗して来るのだ！」

「は！微力ではありますが、全力を尽くします！」

少女は力強く答える。

「うむ！…オルテガと同じ轍を踏まぬよう、ルイーダの酒場へ行き旅の仲間を集めよ」

国王は立ち上がり謁見の間を出て行く。

大臣の一人が少女へ近付き、幾ばくかのゴールドと装備の入った袋を手渡し退室を促す。

アルルは城を出るとすぐに先程手渡された袋の中身を確認する。

中にはこん棒2本、櫓の棒1本、旅人の服1着、50ゴールド…

「何これ！？シヨボ！」

思わず大声を出してしまった自分に驚き、慌てて人気のない裏路地へ逃げ込むアルル。

「はあ〜」

アルルは深い溜息と共に、再度手渡された袋の中身を確認する。

「何度見てもシヨボーいわね…」

満を持してアリアハン王国が、世界へ旅立たせる勇者へ贈る祝儀としては溜息の出るレベルである。

「誰か途中でちよっぱねたんじゃ無いでしょうね！？装備品はともかく、50ゴールドって…その100倍あっても良くない？」

アルルは愚痴をこぼしながら人気のない裏路地から川沿いの小道へと移動する。

幼い頃より『勇者』として使命を帯びた人生を歩んでいたアルル。

剣術も魔法も鍛錬を怠った事はなく、同じ年頃の少女としてはかなりの手練れではあるものの、魔王討伐にたった一人で赴くつもりは毛頭無い。

従って国王に言われるまでもなく、旅の仲間を求めルイーダの酒場へ赴いているのだが…

《この旅は辛く過酷な旅であろうから、最低でも仲間はあと3人はほしい！でも50ゴールドじゃあまともに装備を揃える事も出来ない…1人ぐらいいは装備品の有無に拘わらず、強い仲間が必要ね！居るかしら、そんな都合がいい人？》

アルルが一人先の展望を考え歩いていると、前方の空間に奇妙な穴が出現した！

「な、何よ！あれ？」

地上3メートル程の何も無い空間に何処へ通じているのか分からない穴！

好奇心から穴の側に近付くと…

ドサツ！！

穴から何かが落ちてきて、穴は閉じてしまった…

「いたたたた…何だよ…乱暴に吸い込んで、乱暴に吐き出すって！しかも此処、何処だよ！？何で僕がこんな所に来なきゃいけないんだよ！！」

穴から吐き出されたのは、一人の青年だった。

20代半ばの青年は、紫のターバンを巻きマントで体を覆っているが、その体軀は歴戦の強者を醸し出している。

手には竜を形取った杖を携え、顔立ちは整った美青年である。

そして何より吸い込まれそうな程透き通った瞳が印象的な青年だ。

その青年がアルルに気付き、視線を向け優しく心地よい声で話しかける。

「やあ、こんにちは」

10人の女性が居たら、10人とも見とれるであろう青年に、アルルも例外なく見とれ呆けている。

「見ていたら分かると思うけど…僕、違う世界から来たんだよね！でも、怪しい者じゃないよ！出来れば帰る手立てを探したいんだけど…その前に、此処どこ？」

プロローグ（後書き）

どうもあちゃです。

またやります。

次話の「裏プロローグ」も同時投稿。

二つ読んで初めて一つのプロローグです。

応援よろしく願います。

ご感想お待ちしております。

見切り発車なので間隔開くかも…

裏プロローグ

<グランバニア>

魔界の魔王ミルドラスを倒してから7年の歳月が流れた、ここグランバニアでは国民に絶大な支持を得ている国王が、今日も気ままにメイドをナンパしている。

「やあ、エルフィーナちゃん。今日もキレイだね！今夜あたり僕とどう？」

とても国民に絶大な支持を得ているとは思えぬチャラさで、メイドを口説く国王…

「リュカ！いい加減にしなさい！また愛人増やすつもり！？」

「やや！？違うツスよ、ビアンカさん！！これは僕流の挨拶ツスよ！」

王妃に叱られるも、全く堪えない男…それがグランバニア国王リュカである。

リュカとビアンカの間には3人の子供がいる。

長男のティミー17歳、長女のポピー17歳、そして次女のマリイ7歳。

ポピーは半年前、友好国のラインハットの王子コリンズの元へ嫁いだ為、現在はティミーとマリイが正式なグランバニア王家の血筋である。

現在ティミーは身分を隠匿し、城の兵士として働いている。

またマリイも城下の学校へ平民として通っている。

そのティミーが国王直属の近衛として配属されてから半年、今日も執務室で父親にからかわれていた…

「ねえーティミー…いい加減彼女作れよお…一人で良いからさあー」

「僕の好みの女性が居ないんです！ほつといて下さい」

以前から繰り返されたやり取り…しかし、娘の一人が嫁ぎ親元を離れた事もあり、以前よりしつこく彼女を作る事を進める父…

そんな何時もと同じやり取りに、何時もと違う事態が訪れる。

「あれ？何だこれ！？」

それは、執務机に山積みになった書類の中から出てきた1冊の分厚い大きな本である。

その性格に似合わず綺麗好きなりユカは、整理整頓はきっちり行っていた為、机の上に置かれた見慣れぬ本に違和感を憶えていた。

「何だよ！誰だよ、勝手に置いていったのは！？て言うか、何処から持ってきたんだよ！？」

そう文句を言いながらも、本を開き読み始めるリュカ。（基本、読書好きである）

本には前書きがあり、そこには…

【人生という物語には各々主役が存在する。主役は別の主役と出会い、そしてまた新たな物語が紡ぎ出されて行く。この物語はそんな物語の一つである。】

そして次のページにタイトルが…

【そして伝説へ…】と…

「何だ！？随分と面白そうじゃないか！！」

リュカは書類の山には手を付けず、本の続きを読もうとしている。しかしページを捲り終えた瞬間、大声で激怒し始めた。

「何だこりゃ！？続きのページには何も書かれて無いじゃん！！バカにしてるの！？偉そうなタイトル付けやがって！」

ページを何枚か捲り、全てが白紙である事を確認したリュカはタイトルページに戻り、徐にペンを手にする。

「何が【そして伝説へ…】だよ！現実なんてこんなもんだよ！！タイトル直してやる！」

リュカはタイトルの【そして伝説へ…】にペンで2本線を引くと、自らタイトルを書き直した…【そして現実へ…】と…

すると本が突然輝きだし目の前のリュカを吸い込み始めた！

慌てたリュカは手近にあった物を掴み難を逃れようとしてみたが、掴んだ物が常用している『ドラゴンの杖』だった為、杖ごと一緒に吸い込まれてしまった。

<アリアハン>

ドサツ！！

リュカは地上3メートル程の所に開いた穴から吐き出され、受け身をとることなく地面に落ちた。

「いたたたた…何だよ…乱暴に吸い込んで、乱暴に吐き出すって！しかも此処、何処だよ！？何で僕がこんな所に来なきゃいけないんだよ！！」

そこは先程まで居た執務室とは明らかに違う。
まずそこは外だった。

そして目の前には16・7歳くらいの少女が驚いた表情でリュカを見ている。

「やあ、こんにちは」

どう見てもそこはグランバニアとは違い、過去の記憶から別世界へ迷い込んだ事を察したリュカは、目の前の少女を脅かさない様に話しかける。

「見ていたら分かると思うけど…僕、違う世界から来たんだよね！でも、怪しい者じゃないよ！出来れば帰る手立てを探したいんだけど…その前に、此処どこ？」

青年と少女の冒険の物語が始まろうとしている。

旅は道連れ（前書き）

やっところさ、本編突入！

色々書きたい事はあるんだけど…

まあ、ともかくもお楽しみ下さい。

旅は道連れ

<ルイーダの酒場>

そこは大勢の人々で溢れかえっていた。

まだ昼前だと言うのに、酒を飲んでくだを巻く冒険者達で…

「貴女か噂の勇者様ね。ルイーダの酒場へようこそ。ここは出会いと別れの間よ」

酒場の女主人『ルイーダ』が妖しく美しい表情で二人に話しかける。何故この二人が連れ立ってこのような場所に来たかと言うと…

アルルの真剣な思いと、リュカのいい加減な思いが合わさり化学反応を起こした結果である。

簡単に言うと、自己紹介を終えた二人は互いの状況を説明、助力を願ひ互いに承諾。

アルルの願ひは「見るからに旅慣れした屈強な戦士（風？）の男に魔王討伐の手助けをしてもらう事」

リュカの願ひは「ともかく帰りたいけど、どうして良いのか分からないから、どうせなら美少女と一緒に居る方が楽しいし一緒に付いて行こうかな…」

である。

互いの思いの温度差に気付くことなく、状況は変化し更なる仲間を求めルイーダの酒場へやって来た…

「あの、魔王討伐に旅立ってくれる冒険者は居ますか？」

「さあね…そこらに居るんじゃないかねえ」

アルルの真剣な眼差しも感銘を受けることなく一瞥して終わるルイーダ。

「あははは！昼真っから飲んだくれる連中が役に立つのか？まあ…

使い捨ての盾ぐらいにはなるか！あはははは！」

酒場を見渡したリュカが腹を抱えて笑い出す。

リュカの透き通った声はこの喧噪の中でも、人々の耳に届く声の為、酒場内は一斉に静まりかえる…

血の気の多い冒険者達の中、一人の男がリュカの前へやって来る…
リュカの身の丈程あるう戦斧を肩に担ぎ、リュカより頭2つは大きい男…

「聞き捨てならねえな！俺は最強の戦士ボーデン！テメエの様なヒョロ男なんざ、瞬殺してやんよ！！」

「あ…あんまり自分で最強の戦士って言わない方が良いよ…ものつそい格好悪い！」

自称最強の戦士の矜持を傷つけるには十分すぎる発言だった。

「き、貴様ー！！」

自称最強の戦士は手にした戦斧をリュカに向け振り下ろす！

その場にいた誰もが軽口を叩く男の無惨な死体を予想した…

だが現実には、左手の親指と人差し指で戦斧の刃部分を掴み、顔色一つ変えず受け止めている男と、顔を真っ赤にして戦斧を振り下ろそうと藻掻いている大男の姿だった。

周囲の誰もが目を見開き驚愕する…

昼間から飲んだくれてはいるが、実際にその男はかなりの強さではあるのだ。

大男の戦斧は微動だにせず、押し切る事も、引き抜く事も出来ない。

「ぐおおお！は、放しやがれええ！！」

顔を真っ赤にして呻く大男に気付いたリュカは、

「あ、ごめん。忘れてた」

と、手を離す。

その瞬間、全体重をかけ戦斧を引き抜こうとしていた大男は支えを無くし、後方へ大きく吹っ飛んだ！

大男は2メートル程離れたテーブルの上に背中から落ちる…

大量の酒が並んだテーブルを酒瓶やグラスと共に押し潰し、大男の

意識は遙か彼方に飛び去った…

静寂が包む中、緊張感の無い声が響き渡る。

「あ…この中で我こそはって言う人いない？魔王バカボンを倒す旅に協力してくれる人は！？」

「バラモスです！魔王バラモス！！」

「ん？ああ…それぞれ…！で、どう？」

周囲を見渡すリユカ…

しかし先程までの喧噪はなく、酔いの覚めきつた自称冒険者達は俯き眩くのみ…

「アンタ…俺達に死ねと言うのか…」

「言つてないよそんなこと。僕も死にたくないもん」

「魔王バラモスなんて倒せるわけ無いだろ…！だから俺達は現実を忘れる為に、酒を飲み憂さを晴らしてんだ…」

静まりかえり俯く自称冒険者達の中を掻き分ける様に二人の人影がアルルとリユカの前へやって来た。

二人のうち一人は少女で、身長は170に満たない僧侶風の美少女。もう一人は少年で、身長は更に低く160あるかないかの魔道士風の美少年。

「お、俺はウルフ。まだ駆け出しだけど魔法使いだ！」

「あの、私はハツキです。その…見習いですが僧侶として頑張ります。」

「俺達、絶対足手纏いにならないから連れて行ってよ！」

「私達孤児なんです！バラモスを倒す為なら頑張ります！」

ハツキはアルルと同年齢…ウルフは更に2・3歳年下である…

二人の真剣な眼差しがリユカに襲いかかる。

「僕に言わないで！僕に決定権は無いから！アルルに言って！」
リユカはたじろぎアルルに丸投げする。

アルルは少し引いたものの、笑顔で快諾。

奇妙なバランスの4人パーティーが結成された…

<アリアハン近郊>

「なあなあ！アンタ職業は何なんだ？さっき大男を吹っ飛ばしてたし、やっぱり戦士なのか！？」

好奇心旺盛の少年ウルフが、リュカを質問攻めに行っている。

まだ城下を出て、それ程経過はしていない…

「さっきの大男の事なら誤解だよ。僕はあの人を吹っ飛ばしてないよ。振り下ろされた斧を掴んだら、放せって言ってから放したんだ！そしたら勝手に吹っ飛んだ！」

リュカは嫌がることなく優しく話しかける。

「それに職業って何？今は見ての通りしがない旅人だけど…」

「え！？リュカさんは職業の事を知らないんですか？」

思わずハツキが質問する。

「リュカはこの世界の住人じゃないのよ！」

堪らずアルルが二人に説明をしてあげる。

・
・
・

「へー！じゃあアンタ別の世界から来たんだ！？」

「別の世界って…何だか不思議ですね…」

ウルフとハツキがそれぞれ感想を述べる…

「あんまこと変わんないよ！」

「じゃあアンタ職業は決まってるのか！？以前は何してたんだ？」

「うん。以前は王様でした」

「アンタ馬鹿なのか？そう言う冗談は面白くないんだよ！」

「さっきから気になってたんだけどさあ…止めてくれない！それ…」

「え！？何？」

「僕、きつと多分ウルフより年上のはずだと思っただよね」

「自身持つてくれ、100%年上だから」

「うん。じゃあ、『アンタ』って呼ぶの止めて！僕『リュカ』って名前があるからさ！」

「あ！ごめんなさい。リュカさん！」

慌てて謝罪をするウルフに、怒る風でもなく優しく微笑み頭を撫でるリュカ……

しかし、ゆつたりとした雰囲気は長続きはしない！

アルル達の前に3匹のモンスターが立ちふさがる。

青く半透明なゼリー状のモンスター……スライムである！

アルルは直ぐさま銅の剣を抜き放ち1匹のスライムAへと斬りかかる！

ハツキは手にしたこん棒を振りかぶり、飛びかかってきたスライムB目掛け打ち下ろす！

ウルフはメラを唱え、スライムCへ打ち放つ……が、命中したもののトドメは刺せず、スライムCは手近にいたアルルへ襲いかかる！

スライムAを倒したばかりのアルルは隙だらけで、スライムCの攻撃をともに食らってしまった！

「きゃ！！！」

とは言え多少はメラが効いてたらしく、スライムCの攻撃は大事には至らず、アルルは手の甲を擦り剥いただけで即座に体勢を立て直した。

そして一閃！

最後のスライムをアルルは倒し戦闘は終了する。

「アルルさん！大丈夫！」

ハツキは慌てて近寄りホイミを唱えて傷を癒した。

「ありがとう、ハツキ」

「ごめん！俺がメラをもっとしっかり当てていれば……」

ウルフは申し訳無さそうにアルルに近付き謝罪する。

「そんな事ないよ。ウルフのメラはちゃんと当たってたわよ！あのスライムがタフだっただけよ！気にしないの！こうやってチームプレイで倒したんだから！」

みんな互いの健闘を称えあっている…一人を除いて。

「リユカさん…何やってんの？」

倒したスライムが消え去った跡に落ちてあるゴールドを拾い集めリユカは爽やかな笑顔で報告する。

「スライム3匹で6ゴールド！僕の居た世界より倍だよ！」

戦闘に参加せずゴールドを広い漁るリユカに、何も言えなくなる3人であった…

旅は道連れ（後書き）

これでいいのだ！

反対の賛成の人は居るのかな？

ワシは魔王なのだ！

青春の憤り

<アリアハン近郊>

アルル一行はアリアハンより北に位置する『レーベ』を目指し進んで行く。

途中、スライム、大カラス、一角ウサギなどのモンスターに襲われ戦闘を余儀なくされる！

アルル、ハツキ、ウルフは傷付きながらも勝利を重ね、この新米パーティーの戦い方を実践を持って学んで行く。

そして日は傾き黄昏が空を覆う頃、パーティーリーダーの少女が言葉を発した。

「って言うかりユカさん！貴方も戦って下さい！」
「そうなのだ！」

4人パーティーにも拘わらず戦闘を行っているのは3人…
リユカは戦闘に加わる意志すら見せていない。

「えゝ！僕、争いごと嫌いだよねえゝ…」

「好き嫌いじゃないんだよ！俺達チームなんだからさあ…リユカさんは強いんだろ…一緒に戦ってよ！」

「僕、強くないよ！『勇者』とかそんな大層なもんじゃないし…でも逃げ足には自身があるから、ヤバくなったらみんなを担いで逃げ出すよ！」

右手の親指を立てて爽やかな笑顔で答えるリユカ…

二人の少女はリユカの笑顔に魅了され顔を赤く染め上げる。

夕日に照らされてなければ気付かれていたであろう…

「それよりさあ…もう日が暮れるよ！一旦町へ戻ろうよ！」

「何言ってるんだよ！早くバラモスを倒して平和な世界にしないきゃ！」
「！」

「イヤイヤ！今日は冒険初日だしさ…そんなに慌てても失敗しちゃうよ」

「そうよウルフ！リュカさんの言う通りよ！今日は一旦アリアハンへ帰りましょ！」

「ハ…ハツキまで…」

世の中、女性の意見は採用されやすい。

そして少女の心を魅了したリュカの意見は採用される。

ウルフは少しふて腐れながらも、姉的存在のハツキに従ってしまうのである…

実のところアルル達は町からそれ程離れてはいない。

町を出たのが遅かった事もあるが、冒険初心者の為進行が遅いのである。

<アリアハン>

日も沈み殆どの商店が店じまいをした頃、アルル達はアリアハンの城下町へ帰り着いた。

「私の家はすぐそこなのよ。あんまり広くはないけれど、みんなが寝泊まりする事は出来るから…きつとお母さんも喜んでくれるわ！」
アルルが皆を自宅へ誘う中、リュカは足を止めアルルの提案を拒否する。

「あ…僕は町の宿屋に泊まるよ！」

「何でよ！？そりゃ、大したお持てなしは出来ないけど…わざわざ宿代を払う事ないでしょ！？遠慮はしないでよ！私達仲間でしょ！」

アルルは今までに出会った事のない、この魅力的な男性と少しでも一緒に居たく、必死に我が家への宿泊を薦める。

「分かった分かった…正直言うとな、町で女の子ナンパしてから宿屋へ泊まるつもりなんだ！」

「え…ちょ…な、何考えてんの！？」

ハツキもウルフも頷き呆れる。

「明日から本格的に旅立つのよ！今日はゆつくり休んで英気を養わなければならないのに！そんなの…ダメよ！！」

「うん。それは大丈夫！僕、戦闘しないから！」

言い切るリュカ。

「戦闘はしろよ！」

突っ込むウルフ。

「ともかくダメなものはダメ！」

「そうよ！ナンパなんてダメです！」

我が儘なアルルとハツキ。

「うゝん…困ったなあ…」

リュカは悩み、そしてアルルに質問する。

「じゃあさ、一つ聞くけど…アルルのお母さんて美人？」

「………宿屋へ泊まって下さい！！」

そしてリュカは夜の町へと消えて行く…

日も昇り、一人別行動の仲間を迎えに宿屋まで赴く3人の若者達。

昨晚この宿屋に泊まった客は一人だった為、迷うことなく目的の客室を見つける事が出来た3人。

しかしアルル達3人は、リュカが居るであろう客室の前で躊躇い戸惑っている。

理由は…聞こえるからである！

安普請の宿屋な為、客室内の音がだだ漏れなのだ！

そして、その客室内からはベットの軋む音と女性の喘ぐ声が聞こえてくる…

「何…あの人！？本当に女ナンパして部屋に連れ込んだの？」

呆れる少女二人とは別に、リュカの行いに怒りを感じる少年。

真面目な旅であるにも拘わらず、常に不真面目な大人のリュカが腹

立たしく思い、思わず客室の扉を勢い良く叩き開けるウルフ！

「アンタいい加減にしろ…よ…！？」

一言で言うと、竜頭蛇尾。

ウルフは威勢良く怒鳴ったのに尻つぼみで言葉をなくしていった。室内にいたのはベットに仰向けで寝そべる裸のリユカ…

そしてリユカの上で裸で腰を振る一人の女性…

ウルフと女性は目が合い互いに硬直する。

「シ、シスター・ミカエル…」

絞り出す様にウルフが呟いた…

「きゃー！！！！」

室内に響き渡るシスター・ミカエルの叫び声！

慌てて扉を閉めるウルフ！

・
・
・

それから1時間…

ウルフは茫然自失で喋る事が出来ない。

アルルはシスター・ミカエルの事をハツキから聞く事に…

シスター・ミカエルはアリアハンの教会で勤めるシスター。

髪はクレイで長いブロンド。瞳は青く肌は褐色。小柄ながら胸が大きい。

教会が運営する孤児院で子供達に人気のシスターである。

そしてウルフの憧れの女性でもある…

やっと服を纏い客室から出てきたリユカ。

その後ろから躊躇いながら出てくるシスター・ミカエル。

シスター・ミカエルはハツキとウルフに誰にも言わぬ様懇願する。

リユカは若者3人に、先に外で待つ様促すとシスター・ミカエルにキスをして一時の別れを告げる。

「ミカエルさん。またアリアハンに来る事があつたら貴方の元へ現

れてもいいかな？」

「はい。リュカさんに会える日を楽しみにしてます」

そして二人は再度キスをして別れた。

このやり取りを物陰から覗く3人の若者。

「いやゝゝメングメング！マジ僕の好みだったからさあゝゝ…ちょゝ燃えちゃってさ！全然寝てないよ！」

シスター・ミカエルと別れたリュカはアルル達と合流し、ヘラヘラ状況を説明する。

「おい！！シスターとは何処で知り合ったんだよ！！」

憧れの女性の閨事を目撃してしまったウルフは、半ば八つ当たり気味にリュカへ言葉を叩きつける。

「何言ってるの！？シスターに出会うには教会に行くしかないですよ？」

ウルフの怒気を含んだ言葉に、不思議そうな顔で答えるリュカ：

「リュカさんは教会でシスター・ミカエルの事をナンパしたんですか！？」

シスター・ミカエルの事を知っているハツキは信じる事が出来ず、思わずリュカに問いつめてしまう。

「あ…あり得ない…あの真面目なシスター・ミカエルが…」

「ふざけんなよ！！アンタ、シスター・ミカエルに何て事してんだよ！！シスターに謝れ！！謝れこのヤロー！！」

「ふざけているのは君だ！ウルフ…」

ウルフの悲痛な叫びに穏やかに話しかけるリュカ。

「もし僕がミカエルさんを力任せにレイプしたのなら、ウルフの言いは尤もだけど…僕は口説きはしたが、強制はしてない！今のウルフの言いはミカエルさんの自由意志を軽視している事になる」
リュカはウルフの目を真っ直ぐ見つめ優しく語り続ける。

「ミカエルさんは自由なんだよ…自分で考え、自分で決めて行動する事が出来るんだよ。それを忘れちゃダメだよ！」

リュカに先程までのチャラさはない。

だからこそウルフの憤りは大きくなる。

「うるさい！黙れよ！！お前みたいなチャライ男が、シスター・ミカエルの事を偉そうに語るなよ！！」

そうリュカに吐き付けると、逃げ出す様に町の外へ出て行ってしまった…

「ちょっと！一人で町の外に出ては危険よ！！」

アルルの叫びも思春期の少年の心には届く事は無い…

まだ碌に冒険をしていない魔王討伐一行…

まともに冒険の旅は出来るのだろうか…？

青春の憤り（後書き）

やっちまったよ、この男！

どうすんだよ！

純真無垢な少年少女に悪影響だよ！
なんでこんな奴が主役なんだよ！

おとこ

<アリアハン近郊>

ウルフは走る。

ひたすら走る。

逃げる様に走る。

いったい何から逃げているのか…

旅の仲間からか…

憧れの女性を寝取った男からか…

それとも憧れの女性の自由意志を蔑ろにした自分からか…

もう、何故走っているのか、何故逃げているのか分からないでいる。

そして…ここが何処かも…

気が付けばモンスターに囲まれていた！

大がらすや一角ウサギ、そしてオオアリクイに…

ウルフは慌ててメラを唱える！

メラは一角ウサギに命中！

しかし隙を突かれオオアリクイの爪がウルフの腕を切り裂く！

あまりの激痛にその場に倒れ込むウルフ…

そしてウルフ目掛け突撃してくる大がらす！

何とか身を振り大がらすの攻撃をかわす！

直後、一角ウサギの角がウルフの太腿に突き刺さる！

ウルフは死の恐怖を憶えた。

自分一人では戦う事も逃げ出す事も出来ない…

大がらすが再度ウルフの瞳目掛けて突撃をしてくる！

今度は避けられない…

死ぬ！そう思った瞬間！

「バギ」

強烈なつむじ風が巻き起こり真空の刃がモンスター達を切り裂いてゆく！

「ふう…間に合って良かった」

声のする方を見ると、優しい表情のリユカが近付いてくる。

「……………今の…アンタがやったのか…？」

「まあ、一応…」

リユカはウルフの側にしゃがみ込むと腕と足の傷の具合を確認する。

「リユカさんて魔法使えたんですか！？」

リユカの後ろから現れたアルルが驚き質問する。

「うゝん…まあ、一応…」

ウルフはリユカから目が離せないでいた。

リユカのバギはウルフが知っている…見た事があるバギとは桁が違っていた…

「ベホイミ」

ウルフの傷が完全に治る。

痛みも跡も残らずに！

「べ、ベホイミって高度な治癒魔法じゃないですか！？そんな魔法まで使えるんですか！？」

更に追いついたハツキも驚きを隠せないでいる。

「えゝと…まあ、一応…調子が良ければ…？」

森を出て街道に戻り一旦落ち着いた一行は一斉にリユカへ質問をぶつける！

「何であんなに威力のあるバギを使えるんだ！？」「何で魔法を使える事を黙ってたの！？」「僧侶でも相当修行を積まないと使えないベホイミを何で使えるんですか！？」

等々…

「落ち着いてみんな…一人ずつ答えるから」

「じゃあ俺の質問。リユカのバギは威力が凄すぎる！何で？」

「分かりません！次、アルル」

「何で魔法使える事黙ってたの？」

「言ったら戦闘に参加しろって言われるから！絶対参加したくないもん！次、ハツキ」

「ベホイミってかなり修行しないと使えないと思います。どうして使えるんですか？」

「気付いたら使えてた！以上、質問タイム終わり！！」

リユカは強制的に質問を打ち切る。

「ちよつと勝手「そんな事よりウルフ！！」

真剣な瞳に切り替わるリユカ。

「ウルフ！一人で町の外に出たら危ないだろ！アルルもハツキも心配したんだぞ！」

「うゝ…そ、それは…だって…あの…」

リユカは少し屈みウルフと同じ目線で見つめ続ける。

「……………ごめんなさい……………」

「うん。良い子だ！」

リユカはウルフの頭を少し乱暴に撫でる。

本来ウルフは子供扱いをされるのが大嫌いであるのだが、相手がリユカだと何故か怒りが湧いてこないのである。

「ごめんな…ウルフ…ミカエルさんに惚れてるなんて知らなかったからさあ……………」

「い、いや…そ、そんな…惚れてるって言うか…その…」

ウルフは顔を真っ赤にして俯く…

そして、それを年上の女性二人がニヤけながら見守る。

「僕にも経験があるんだ…憧れてた女性の閨事を目撃しちゃった事が…」

「本当に！？」

若者3人は、思春期特有の興味心からリユカの話に耳を傾ける。

「僕が幼い頃住んでいた村に、フレアさんと言うものっそい美人のシスターが居たんだ。でもある日フレアさんと見知らぬ男が、物置小屋でエッチしている所を見ちゃってね…シヨックだったなあ…」

「それで…リユカさんはどうしたの？」

まさに同じシチュエーションのウルフは、心のモヤモヤを打ち払い、たいが為に続きを急かす。

「うん。男の方に石でもぶつけてやろうと思って後を付けたんだけど、見失っちゃってさ…それ以来そのヤローには会った事ないよ」

「じゃあ…そのシスターとはどうしたの？」

「最初は気まずくてさ…余所余所しくしちゃってさ…そうしたらフレアさん…涙目で僕に謝って来たんだ…『私リユー君に嫌われる様な事しちゃったかな？』『ごめんね。謝って許して貰えるか判らないけど…』って…」

「え！？シスターの方が謝っちゃったの？」

「そうなんだ。僕、最低だよ…こんなにも優しいフレアさんの心を傷つけてしまったんだ…フレアさんは何も悪くないのに…」

アルル、ハツキ、そしてウルフはリユカの切々と語る過去に胸が苦しくなる思いで聞き入っていた。

「だからウルフ！どんなに憤りを感じても、大好きな人にその感情を見せてはダメだよ」

《そうか…シスター・ミカエルはリユカさんの優しさを一目で見抜いたんだ…だから好きになっちゃたんだ…俺もリユカさんみたいな男になれる様頑張ろう！！》

ウルフは多少の誤解を脳内で補正し、リユカを目標の男へと昇華させてしまった。

果たしてウルフに幸せは訪れるのでしょうか……？

昨日とは違い、戦闘（リユカ抜き戦闘）にも慣れてきた一行は日が暮れてしまった事もあり、野営の準備を行っている。

戦闘以外の事となると俄然張り切る男リユカ…伊達に幼少期より旅慣れしてきた訳ではなく、テキパキと野営の準備を進めて行く。

野営などした事のない若者3人は、ただ呆然と見続ける事しか出来ず、アルルは思わず…

「戦闘も張り切って戦ってくれると助かるのだけど…」

まあ…言うだけ無駄であるが…

全ての準備が整い、焚き火を囲い食事を始める。

そして今更ながらリュカが疑問を口にした。

「ところでさ…今、何処に向かつてるの？」

「言っただでしょ！レーベよ」

「そこに何があるの？」

「……………リュカさん…私達の旅の目的を理解してる？」

「うーん…概ね…」

ほぼ理解していないリュカにアルルが優しく説明してくれた。

「私達は魔王バラモスが何処に居るのか分かってません。ですから、世界中を旅してバラモスの居場所を探し出そうと思ってます。その為にはこのアリアハン大陸から出なければなりません。そしてこの大陸の東に『いざないの洞窟』があります。その奥にはロマリヤ大陸に繋がる『旅の扉』があります。いま、そこを目指してます」

「へー…じゃ何でレーベに行くの？」

「アリアハン城からいざないの洞窟まで戦闘をしなくても1週間はかかります。その間ずっと野宿はイヤでしょう？だから立ち寄りんです」

「そっか…レーベには…美人が居るかな？」

《ここに居るじゃない！》

アルルは叫びそうになりながらも冷静な瞳で見据える事で大惨事を回避する事が出来た。

そして夜は更け、各々眠りの体勢に入る。

アルルとハツキはリュカが、寝ている自分の側に来るのではないかと期待を持って横になった為、この晩は一睡もする事が出来なかったらしい…

果たして二人の乙女が、女に変身する日は来るのであろうか…
そして、その担い手は…

レーベ

<レーベ>

アリアハンの城下町を出て3日。

夕方と呼ばれるにはまだ早い時間、アリアハン大陸にある小さな村『レーベ』に一行は到着した。

レーベ…この村には目を引く大きな建物も、人々が集まる酒場もない、極めて質素な村…それがレーベである。

アルル一行はひとまず宿を確保してから村内を見回り出す。

若者3人が、武器屋や道具屋を見て今後の旅に必要な物を購入している中、若干1名は若い村娘をナンパする為、さほど広くない村を探索し歩いている。

「何であの人なんなに元気なの…？」

「俺が知るかよ！アルルの方が付き合いは長いんだろ！」

「数時間の差よ！」

リユカのバイタリティに疲れ切った3人は、早々に宿屋へ戻り旅の疲れを取り去る事に専念した。

翌朝…

まだ人々が起き出さない時間に、目が覚めてしまったアルルは、外の空気を吸いに宿屋から近くの広場まで散歩に出かける。

そこで見た物は…朝靄の中佇む一人の青年の姿だった…

紫のターバンを巻くその青年は、広場の中央に佇み周囲に寄つてきた小鳥達と楽しそうに会話をしている。

その幻想的な光景に見入っていた少女に気付いた青年は、優しく微

笑み少女に語りかける。

「やあ。おはようアルル。今日も可愛いね」

「お、おはようリュカさん…早起きのね」

アルルも分かっているのだ！

リュカにとって『可愛いね』や『キレイだね』は日常挨拶の内なのだと…

それでもこの素敵な青年に、素敵な笑顔で言われると期待をしてしまふ…その言葉の裏を…

アルルはまだ出会って数日のリュカにどうしようもない恋心を抱いてしまっている。

少しでもリュカと一緒にいたい…一緒に会話をしたい…そう思うも、これまで年頃の女の子としての生き方をしてこなかった為、何をしたいのか、何を話せばいいのか分からないのである。

そして永遠とも思える沈黙の後、絞り出した言葉が…

「リュカさん！私に剣の稽古をつけて下さい！」

である。

その日から早朝…可能な限り…アルルとリュカは手合わせをする事となった。

無論、リュカは最初は断ったのだが…アルルの若さ溢れる気迫と、リュカ元来の面倒見の良い性格から、済し崩し的に了承してしまったのである。

キン！ガツ！キン、キン！ガツツ！！

小さな村に早朝から響き渡る金属音。

アルルの銅の剣と、リュカのドラゴンの杖とがぶつかり合う音。

状況は素人が見ても一目瞭然。

リュカの圧勝である。

全力で打ち込むアルルに対し、涼しげな表情で全てを去なすリュカ…

「はあ、はあ、はあ…」

両膝に両手を乗せ肩で息をするアルル。

「今日はもういいだろ？疲れちゃったよ」

疲れるところか汗一つかいてないリユカ。

「ずるい」

そして二人の手合わせを見つめ、不平を言うハツキとウルフ。

「アルルだけズルイです！私もリユカさんと手合わせしたいです」

「俺も！」

「ちょ、僕もう疲れたから…あ、明日からね…明日の朝からにしようよ！」

結局、パーティー全員と朝の特訓をする事になったリユカである。

<アリアハン大陸>

一行は東に位置するいざないの洞窟を目指しレーベを出立する。

途中、何度と無くモンスターの襲撃に会い、戦闘を繰り返す。

無論、3人で…

しかし3人共理解し始めていた…リユカの圧倒的な強さを…

そしてリユカの強さに頼る事の恐ろしさを…

魔王討伐を目的とするアルル達にとって、リユカ一人に依存しては強敵を相手にした時にパーティーとして戦闘が出来なくなるのではないかと言う事の恐ろしさを…

だが…同時に安心もしている。

本当に危険に陥った時はリユカが助けてくれるであろうと…

根拠はないが3人共、そう信じているのである。

毎度の如く、野営の準備になると張り切るリユカ。

しかし若者3人も手慣れたもので、薪を集めたり食事の準備をしたりと、冒険者として成長していつてる。

そして手慣れてくると生まれるのが余裕で、余裕が出来ると会話も

と言う、我欲丸出しの思考に到達してしまった少女二人。

「じゃ、じゃあ…もし元の世界へ戻れなかった場合は、この世界で新たな家庭を築くつもりですか？」

アルルの希望を込めた質問に…

「イヤ…帰れない事はないと思うよ…なんだかんだ言っても僕の周りの人々が躍起になって僕を連れ戻そうと画策するだろうから…僕の周囲には結構凄い人々が居るからね！」

リュカの答えにかえって闘志を燃やす少女二人。

そんな空気を読めない男二人は、リュカの思いで話で盛り上がる。

「……………でね、プサンはね……………」

そして夜は更ける。

アルルとハツキはどのようにリュカの心を掴むのか…

あのチャライ男の心を掴む事が出来るのか…

……………ムリっぽくない？

レーベ（後書き）

一応アルル達の装備を紹介します。

アルル

銅の剣

旅人の服

ハツキ

こん棒

旅人の服

ウルフ

檜の棒

布の服

リュカ

ドラゴンの杖

王者のマント

アレ？

紹介する程じゃなかったね。

こう言うの不要ですか？

行き止まり

< いざないの洞窟 >

小さな湖の畔にいざないの洞窟への入口は存在した。

アルル達は警戒しつつも洞窟内部へ下りて行く。

暫く進むと何もない行き止まりの空間に出た。

そして、そこには一人の老人が：

「あの…お爺さん。この洞窟には他の大陸に抜ける事の出来る『旅の扉』があると聞いて来たんですが…それは何処ですか？」

アルルが躊躇いがちに訪ねると：

「お前さん方：『魔法の玉』はお持ちかな？持っていないのであれば、これより先へは進めんよ。出直してきなさい」

「あ、あの！魔法の玉って何ですか？」

「…ふう…そんな事も知らんでここまで来たのか…」

《ムカー！！何なのこの爺は！人が下手に出てりゃつけ上がりやつて！》

「あ！僕、聞いた事あるよ。確かレーベにある様な話だった…かな？」

アルルが老人に対して暴言を吐き出す直前、リュカが遮り話を始める。

「リュカさんは何でそんな情報を持ってるんですか？」

「うん。レーベで女の子をナンパしたら教えてくれた。でも『僕の玉の方が凄いいんだよ』なんて事言ってたので、詳しい事は知らない」

一行はリュカの言葉を信じ、取り敢えず洞窟を後にする。

洞窟を出た所でアルル達は多数のモンスターに囲まれてしまった。バブルスライム3匹、魔法使い4体、サソリ蜂3匹…

「ぐつ！ちよつと数が多いわね！」

「愚痴つてもしょうがないだろ！ともかくやるしかない！」

「バブルスライムは私が『ニフラム』で何とかしますから、他をお願いします！」

「じゃあ、私が魔法使いでウルフがサソリ蜂ね…いける？」

「やるしかないだ」魔法使いは僕が相手をしよう」

「「え！？」」

普段、戦闘に参加しないリユカが自ら戦いを申し出た！

つまりそれ程この状況はピンチなのである！

「ほら！呆けてないで…行くぞ！」

慌てて各々の相手に攻撃を開始する。

ウルフが新たに憶えた魔法、ヒヤドで1匹のサソリ蜂を凍り漬けにすると、アルルが直ぐさま2匹のサソリ蜂を切り倒す。

ハツキもまた、憶えたてのニフラムでバブルスライムを消し去る。

その間、時間にして1分弱…

各々の相手を倒しリユカの戦闘を見学しようと振り向くと、戦闘前と同じ状況で立っているリユカが…

しかし、魔法使い4体は既に倒されていた…

《い、いつの間に…リユカさん、強すぎて参考にならない…》

3人共、全てではないにしろ戦闘中リユカの動きに注意をしていたのに、戦った痕跡を残さぬまま4体もの敵を瞬殺してしまったリユカに驚きを隠せない。

「さあ…一旦レーベに戻るんでしょう？誰かルーラとか使える人居る？」

「ル、ルーラなんて高位魔法、使える訳ないよ！それにルーラは術者一人しか移動出来ないんだから！」

ウルフが少しの憤慨を込めて説明してくれる。

リユカの居た世界ではロストスペルであったルーラだが、この世界では普通に存在する様だ…

しかし、かなりの修練を積んだ者にしか習得できない高位魔法で、

基本的には術者のみの有効範囲らしい…

「じゃ、サクサク行きますか！レーベまで5日くらいかかるし…」

5日という具体的な数字に、げんなりする若者3人…

アルルは情報収集の大切さを骨身に染みて理解する事となった…

<レーベ>

辺りが暗闇に覆われる頃、アルル一行はレーベに到着した。

早速宿の確保に向かったのだが、生憎部屋が埋まっていて大部屋を1つしか確保出来なかった。

兎に角疲れを癒したアルル達は大部屋で了承。

部屋に着くなり深い眠りに旅立った………リュカ以外は…

朝、アルルが目覚ますと…リュカが居ない！

また外で小鳥と戯れているのかと思い広場へと向かう。

しかし居ない…

村内を見回ると村外から帰ってくるリュカを発見する。

「リュカさん、何処行つてたんですか！」

慌てて近寄り声をかける。

少し驚いた表情をするリュカ。

そしてリュカからは微かに女性物の香水の香りが…

「ちよ、ちよつとそこまでお散歩？」

《散歩な訳ない！きつと女と会っていたのよ！でも何処で？村の外に居るの？いえ、考えられない…じゃあ何処で？きつと聞いても答えないだろうなあ…》

腑に落ちない点も多々あるが、アルル達は朝の鍛錬を終え村内で情報収集をする。

程なく魔法の玉を制作していると言う老人の家を突き止めた。

向かう一行：

コンコン

アルルは丁寧にノックをして住人を呼び出す……が、出てこない。

「留守……かしら？」

「いや……気配はするよ。人嫌いって言われてたからね……居留守だよ！」

ゴンゴンゴン

今度はリユカが力任せにノックする。

「おい、爺！居んのは分かってんだ！大人しく出てこい！出てこないとドアぶち破って乗り込むぞ！」

ゴンゴンゴンゴン……ガチャリ！

鍵が開く音と共にドアが開き老人が顔を出す。

「やかましい！！いったい何の用じゃ！！用が無いなら帰れ！！」

「痴呆症ですか？用があるからノックしたんです。用が無ければこんな爺の面など見たくない」

この間、リユカの表情はいつも通りの優しい微笑み……若者3人はあからさまに引いている。

「……………で、何用じゃ！」

「うん。魔法の玉を頂戴」

「何で見ず知らずのお前等に魔法の玉をやらにやなんのだ！」

リユカと老人の険悪なムードは続く……（老人の一方的な険悪ぶりですが）

「魔王バラモスを倒す為には必要なんです。お願いします、ご老人！」

堪らずアルルが口を挟む。

「ふん！お前等なんぞにバラモスが倒せるのか！？無駄な事に儂の発明品を渡すつもりはない！」

「そんなのやってみなければ分からないだろ！最初から諦める奴は嫌いだ！」

……
長い沈黙が続く……

「良いじゃろ……交換条件を達成したら魔法の玉をくれてやる」

「あ、ありがとうございます！」

「例を言うのはまだ早い！達成してからにせい！」

「んで、条件って？」

「儂はな『盗賊の鍵』という物を作ったのだが、『バコタ』という盗賊に盗まれてしまったのだ。それを取り返してこい！この玄関もその鍵で開く！取り返したのなら勝手に入って来るが良い！その時は魔法の玉をくれてやる」

ボタン！ガチャリ！

一方的に条件を言って、また引きこもる老人。

「勝手だなあ」

行き止まり（後書き）

あちゃ「今日はリュカさんに質問です。何でルーラを使える事を黙っていたのですか？」

リュカ「だつて言ったら良い様に利用されるじゃん！ちょーめんどくせーじゃん！タクシーじゃねえっの！！」

あちゃ「はい。基本、自分の能力を明かさないめんどくさがりやの主人公、リュカさんでした！」

では、次話もお楽しみに！

空白の一昨晚（前書き）

今作品での勝手に設定。

ルーラ及びキメラの翼は、使用者単体に効果がある魔法（アイテム）です。

ですので、4人がキメラの翼で移動する場合、キメラの翼が4つ必要になります。

今後そのつもりでお読み下さい。

空白の一昨晚

<レーベ>

アルル達は宿屋へ戻り作戦会議を行っている。

「さて、何とか魔法の玉の所在を掴んだけど…今度はバコタね！」
アルルが切り出す。

「バコタって言えば、アリアハンで名を轟かす盗賊だろ…捕まえるのは難しくないか？何処にいるのかも分からないし…」

ウルフが溜息混じりで意見を言う。

「バコタならアリアハン城の牢屋に居るよ」

リユカが状況打開の一言を発する。

「…な、何でそれを知ってるの!?」「…」

驚き詰め寄る3人…

「まあまあ…さっさとアリアハンへ行こうよ！ほら、『キメラの翼』も用意しておいたから」

アルル達は納得しきれないまま、リユカに促されアリアハンへと舞い戻る。

<アリアハン>

一行はアリアハン城下を城に向かい歩いて行く。

すると前方からうら若いシスターが一人駆け足で近付いてくる…胸を盛大に揺らしながら…

「あ！シスター・ミカエル!!」

嬉しそうに声を上げるのはウルフ。

しかしシスターはリユカに抱き付き話し出す。

「リユカさん！昨晚はありがとうございます。それと…楽しかった

です……」

シスターは頬を赤らめ語り出す。

不満顔のウルフ。

シスターからは、今朝リユカから漂ってきたのと同じ香水の香りが……
《まさか……わざわざキメラの翼を使ってアリアハンへ戻ったの？
キメラの翼だって、ただじゃないのよ！……でもおかげでバコタ
の情報が手に入ったし……でも……》

やはり納得のいかない3人を伴い、シスターと別れ城の地下牢へと
向かうリユカ。

「あー！テメーは昨日の晩の……！テメーのせいで掴まっちゃったじ
やねえーか！」

リユカは鉄格子越しにバコタと対面する。

「何言ってるんだよ！ミカエルさんの財布をすったのが悪いんだろ！」
「どうやらリユカは、昨晚シスター・ミカエルとデート中にバコタと
遭遇し、財布を盗む現場を押さえた様である。」

「まあいい……そんな事より、盗賊の鍵を返してよ。本来の持ち主か
ら依頼を受けたんだ！」

「あ……盗賊の鍵？……ああ！アレなら『ナジミの塔』の爺に騙
し取られたよ！」

「ナジミの塔？なんだそれは？馴染みの店みたいなものか？行きつ
けか？……じゃあ、その店の場所を教えるよ！」

「店の名前じゃねえーよ馬鹿！そう言う名前の塔があるんだよ！」

「変な名前！バコタの次くらいに変な名前……！」

「うるせーよ！サッサと行けよ！そして死ね！」

「なんだ？悪い事して掴まったクセに、反省の色が見えないぞ！お
仕置きしちゃう！」

そう言うところリユカは鉄格子の隙間から左手を入れバコタに向かって
魔法を唱える。

「バギ」

ヒュウ、ドゴー！

「うごっ……！」

リュカから発せられたバギには殺傷能力は無い、強力な風の固まりがバコタにぶち当たった！

「ほぐれ、バギ、バギ、バギ！」

「がはっ！……ごほっ！……ちょ、ごめんなさい！も、止めて……うごっ……！」

「うん。勘弁してあげる。悪い事したら反省するのが常識だからね！もうダメだよ、悪い事しちゃ」

「凄……魔法を改造しちゃった……」

只今バギの魔法を懸命に修練中のハツキは、リュカの魔法の才能に心底憧れ、恋心と合わさり、とんでもない感情へと変化し始めている……

大変危険な兆候です！

「んで……そのナジミの塔って何処にあんの？」

「は、はい……アリアハンの西の小島に……あ！でも大丈夫です！更に西の岬に洞窟があって、そこからナジミの塔へは繋がってます！」

「うん。ありがとう。じゃあ、僕達行くね。もう悪い事しちゃダメだよ。出所したら、全うに生きるんだよ」

リュカのバギが堪えたのだらう低姿勢なバコタの情報を元に、件の洞窟を目指すアルル一行。

<ナジミの塔への洞窟>

ジメジメと嫌な雰囲気を放つ洞窟を、度重なる戦闘に勝利しながら突き進む一行。

イヤ……言い直そう……度重なる戦闘に勝利する3人と戦闘をしない1人の一行……

更に言えば戦闘しないだけではなく、終始歌を歌いモンスターを呼び寄せるリュカ！因みに曲目は『YOUNG MAN』である！

「ちょ、戦闘しないのはいいとしてもさ、歌うのは止めてよ！」

肩で息するウルフの悲痛な叫び。

「あははは！以前、息子にも同じ事言われた！」

「息子さんも苦勞してるんですね…」

「でもさ…若い内の苦勞は買っでもしろって言うじゃん！良いんじゃない？」

本人が聞いたら間違いなく激怒するであろう発言をするリュカ。

会った事もないリュカの息子に、心底同情するウルフ。

「じゃあ…そこまで言うリュカさんは、どんな苦勞をしてきたんですか？」

単に歌われるより静かに語らせておく方がマシと思ったアルルの発言は、思わぬ重い話を引き出す結果へと繋がった。

リュカの幼少期の苦勞話…

目の前で父親を…自分が人質になった為殺された話から奴隷時代の10年間…

口調は軽く、爽やかに話すものの、洞窟内と言う雰囲気と話の内容がマッチしてしまい、号泣し始める3人…

アルルにしては、幼い頃より同年代の女の子と遊ぶ事も許されず、勇者としての重荷を背負わされ、この世で最も不幸だと思っていた…ハツキとウルフも同様に、幼い頃から孤児院で生きてきた自分ばかりの不幸だと思いこんでいたのである。

しかし、それでも…親を目の前で殺された事も無ければ、鞭で打たれ過酷な労働を強要された事も無い。

果たしてリュカと同じ人生を過ごしたら、リュカと同じように明るく爽やかな性格になっていたであろうか？

そう思った時、リュカに対する尊敬の度合いが飛躍的に上昇してしまふ若者達…

道を踏み外す事の無いよう祈りたいものである…

空白の一昨晚（後書き）

ルーラ&キメラの翼の件：

クレーム等は受け付けません。

容認をお願いします。

だって…ルーラはともかくとして、キメラの翼って都合良すぎなんですよ！

安価であんな凄い能力って…

困るんですよ！

ナジミの塔

<ナジミの塔>

リュカの過去話に目を真つ赤に腫らす程泣いてしまった若者3人と、そんな事気にもせず歌いまくりモンスターを寄せまくるリュカ達の一行は、洞窟を抜けナジミの塔の1階まで到達する事が出来た…半日以上使つて…

外には黄昏が訪れ、アルル達も疲労のピークに達した為、体を休ませる事に意見は一致した。

「うゝん…何処か身を寄せて休める所は無いかな？」

元気だけは有り余っているリュカが率先して塔の1階部分を探索しに行く。

すると、また地下へと下りる階段があり、その先から人の気配が漂ってくる。

もしかしたらバコタが言っていた老人が住んで居るのかと思い、リュカは3人を抱き抱えるように連れ込んだ。

「いらつしやい」

しかし、其処に居たのは老人と呼ぶにはまだ早い、中年の男性が一人…

にこやかな顔でリュカ達の到来を歓迎する。

「……………あの…ここは何ですか？」

「ナジミの塔特別施設の宿屋だ！お一人2ゴールドでいつでも大歓迎だ！」

「失礼を承知で聞きますが…何でこんな所で経営を？」

さすがのリュカも慎重に質問を続ける…

「良い質問ですなえ！」

ミスター・ニユースが貴様は！と言つツツコミをぐつと我慢するリュカ。

「此処ならライバル店もなくて良いと思っただけ…ライバル店どころか客自体が居ないんだよね！盲点だったよ」

《ヤバイ、コイツ馬鹿だ！まともに相手しない方がいい！》

「大変ですね…4人泊めてもらえますか？」

「もちろんだとも！4人で8ゴールド。前払いで良いかい？」

「食事は……期待しない方が良いでしょう？」

「馬鹿にしちゃいけないよ！こう見えても若い頃は料理人を目指して修行したんだ！周りは海に囲まれているし、庭では野菜も作ってるんだ！私の料理だけを目当てに来る客も居るくらいなんだよ！」

《じゃあ普通に町で経営してもやっていけるだろうに…》

「へー…じゃあ、食事付きでお願いします。…あと幾ら払えば？」

面倒事を嫌うリユカは突っ込まない。ただ流すのみである。

「大丈夫！宿泊料に入っているから」

ウィンクする店主に苦笑いのリユカ…

ともかくは疲れを癒す事が出来るのはありがたい…

思いがけずベットで睡眠をする事の出来たアルル達は、朝から元気にナジミの塔攻略へ出立。

「あの宿屋…料理の腕前は一級品だったね」

リユカの感想に全員頷く。

「絶対、営む場所…間違えてるよね！」

またも全員頷く。

さて気を取り直してナジミの塔攻略！

この塔は2階以上の階に外壁が存在せず、吹き曝しの空間が存在する。

強烈な海風吹き込むそのエリアは、大変危険で気を抜くと外まで放

り出されそうになる。

3人共リユカにしがみつく様に塔内を移動して行く。

「しかしハツキは結構胸が大きいね！今度、直に見せてもらいたいよ！」

リユカ以外の男性が発した言葉なら、間違はなくハツキの鉄拳が炸裂していたであろう。（意外にハツキは腕力があるのだ！）

しかしリユカの発言となると対応が変わる。

更に体を押し付けリユカの腕に胸を押し当てる。

程なく風の吹き込まない空間へ入りアルルとウルフがリユカから離れる。

しかしハツキはリユカの腕にしがみついたまま離れない。

「あの…ハツキさん？…離れて…」

「でも…リユカさん、オッパイ好きでしょ！？」

「うん。好きだよ！でもね…今は歩きづらいから…離れて…」

そしてハツキも、渋々離れる…

リユカに責任は取れるのでしょうか……………？

『フロツガー』や『人面蝶』と言ったモンスター達と幾度も戦闘をし、アルル達は最上階へと到達した。

其処には一人の老人が…

狭いが整頓された綺麗な部屋…

老人が一人で暮らしているとはいえ、明るい内装の部屋。

リユカは思わず叫ぶ。

「何だ此処！何でこの塔は人気なんだ？そんなに暮らし易いのか？」

「ふおおおお…人嫌いの老人からすると暮らし易い事この上ないぞ！」

老人はリユカの発言に気分を害した風もなく、楽しそうに笑い出す。

「あの、ご老人…実は…」

アルルが意を決して老人に話しかける…が、

「これじゃろ！」

アルルの言葉を聞く前に、懷から1本の鍵を取り出しアルルに見せる。

「儂は夢でお前さん達に盜賊の鍵を渡すのを見たんじゃ…ほれ、持つて行くが良い」

「ありがとうございます」

「うむ。礼はいい…早う世界を平和にしてくれ…」

アルルは力強く頷くと老人の元を後にする。

これで魔法の玉を手に入れば、世界へ羽ばたく事が出来る！
打倒バラモスという目標へ近付く事が出来る！

アルル達の決意は強まった！

アルル、ハツキ、ウルフ、3人はそれぞれ強まった決意を胸に、塔を下りて行く…

リユカは…面倒事に首を突っ込んだ事に少々後悔をしている…
何でこの男がもてるのか些か疑問である？

<レーベ>

バン！

「爺！約束通り盜賊の鍵を取り戻してきたぞ！玉よこせ！」

勢い良くドアを叩き開け不躰に叫ぶリユカ…

「騒がしいのお…ほれ、魔法の玉ならそこの箱の中に入っとる。
勝手に持つて行け！」

そう言い顎で部屋の隅にある箱を刺す老人。

アルルは箱に近付き開けようとする…が、開かない！鍵がかかっている。

「あの！開かないんですが！」

「鍵がかかったままじゃ開く訳が無かるう！開けて取り出せ！」

「…………あの…鍵は？」

「何じゃ！？取り戻したんじゃ無いのか？それで開けてサッサと立

ち去れ！」

「ん？ちよつと待て爺！それじゃ何か…この鍵が無かったら魔法の玉を取り出す事が出来なかったのか！？」

「それがどうした！？」

「だったら最初から言えよ！『鍵を盗まれて魔法の玉を渡せないんですう』って！」

「ふん！どつちでも同じじゃろ！魔法の玉も手に入ったんじゃ、サツサと去れ！目障りじゃ！」

「このクソ爺…言われんでも立ち去るわ、ボケエ！ほれ、鍵返すよ！」

リユカは老人の目の前に盗賊の鍵を晒す。

「いらんわ！元より世界を救う者達に渡すつもりで造ったんじゃ！持つてけ、馬鹿ガキ共！」

「…………爺さんアンタ……………」

リユカに先程までの剣幕はなく、老人を見つめる。

「もう用は無いじゃろ！こんな所で時間を潰してないでサツサと世界を平和にして来い！」

アルル達は老人に追い出されるように家から出る。

「あのお爺さん…結構良い人…みたいですネ…」

ハツキの感想にリユカは、

「口が悪い、ムカつく！」

そう少し笑いながら答える。

随分と回り道をしたが、やっと魔法の玉を入手した一行。

これでいざないの洞窟の奥へ入る事が出来る…はず。

世界へ羽ばたける事を信じて、今日はレーベの宿屋で疲れを癒す。

リユカを除いて…

…あの男は今夜もコッソリ、アリアハンへ戻っていた…

そして夜は更け、朝が到来する…

ナジミの塔（後書き）

気が向いたのでアルル達の年齢を紹介します。

アルル 16歳

ハツキ 17歳

ウルフ 13歳

リュカ 25歳？（石化時代を加算すると33歳かな？）

ところで、アルル達の性格って、どんなのがしっくりきますか？

旅の扉

< いざないの洞窟 >

かなりの時間を浪費して再度この行き止まりへと戻ってきたアルル達。

此処で番をしているかの様に佇む老人に、魔法の玉を見せつけるアルル。

「どうよ！今度は持ってきたわよ！」

「ふむ…では、魔法の玉を其処の壁にセットして玉から伸びる紐に火を点けなさい」

アルルは言われた通り壁に魔法の玉をセットする。

「火は俺が点けようか？」

ウルフが申し出るが、

「うっん、大丈夫よ！私もメラを憶えたから」

そう言うともメラを唱えて火を点ける。

ジュ~~~~~

そしてリュカが何となく感づく。

「……………なあ、爺さん…あの玉を使った所を見た事はあるのか？」

「壁が崩れて無いだろう！今回が初めてだ！」

「……………！！ヤバイ！！！！アルル、早く魔法の玉から離れる！」

リュカは慌ててアルルに近付く！

そしてアルルの身体を抱き寄せ魔法の玉を背に蹲る！

「みんなも伏せろ！！！！！」

ドガンンンン！！！！！！

強烈な爆発音が洞窟内へ響き渡る！

・
・
・

「み、みんな無事？」

耳鳴りが止まない状態のハツキが無事を確認する。

「お、俺は大丈夫……」

「俺も……大丈夫じゃ……」

そして尤も爆心地に近かったリュカとアルルに視線を向ける……

リュカはアルルに覆い被さるようにして動かない……

慌ててハツキとウルフは駆け寄る！

「大丈夫！？しっかりして！」

「わ、私は大丈夫……」

リュカの下にいるアルルが無事を告げる。

そしてリュカもノツソリと起きあがる！

「……ふ……」

「……ふ？」「……」

リュカが何かを言おうとしている……

「……ふ……ふざけんな……！何が魔法の玉だ！爆弾じゃねえーか……！だつたら『魔法の爆弾』とか『爆弾の玉』とか『爆』の字を付けとけよ……！だいたい魔法は全然関係ねえーじゃねーか……！……」

リュカの怒りは収まらない。

「だいたいテメークソ爺……！どういう物かも分からないで偉そうにしてんじゃねー！死にかけたぞコノヤロー……！」

一緒に被害にあった老人にまで怒鳴り出す。

「ま、まあまあ……落ち着いてリュカさん……」

宥めるアルル。

「ほ、ホラ、リュカさん……道が開けましたよ……！」

宥めるハツキ。

「リュ、リュカさん……先を急ぎましょう……！新天地には美女が居ますよ……！」

宥めるウルフ。

リュカは怒りが収まらないながらもウルフの『美女』の言葉に反応し、新たに開けた道へ進み出す。

グッジョブ、ウルフ！

いざないの洞窟内部は、所々穴が開いており危険極まりない造りになっている。

そんな洞窟内を進行中、アルルがお礼を言い出した。

「リュカさん。さっきはありがとう。おかげで怪我一つしませんでした」

「うん。アルルが無事ならお礼はいいよ……」

「リュカさんこそ怪我は無いですか？」

「ああ大丈夫！このマントはね『王者のマント』って言ってね、結構丈夫なんだ！『王者』なんて僕には似合わないけどね」

「そんな事無いです！リュカさんにとっても似合ってます！……その……か、格好いいです」

「ありがとう。でも以前、友人が……『王者？お前は違っただろ！』って言うてやがった！」

「その友人で……男の人ですか？」

「ああ、ヘンリーって言う空気の読めない馬鹿だ！」

友人が男だと知って何故か安心するアルル。

そんなやり取りを聞いていてヤキモチを妬くハツキ。

「リュカさん！そのマントは凄いマントなのかもしれませんが、一応怪我がないか見せて下さい！私が治療しますから！ほら、背中見せて下さい！！」

ハツキは此処ぞとばかりにリュカの服を捲る！

そして強引にリュカの服を捲り出てきた背中を見て言葉を無くす……傷だらけ……リュカの背中では傷だらけなのである。

それも全て古傷……鞭で打たれ、木材で殴られた傷……

「ごめんなあ……酷い背中だろ！？君達若者に見せる背中じゃ無いよね……」

言葉を無くし固まる3人に優しく謝るリュカ。

リュカの過去を聞き、酷い時間を過ごしたと想像をしてはいたが、証拠の傷を見て考えの甘さに落ち込む3人…

そんな3人を見て元気づけようと歌い出すリュカ。

そして戦闘が始まり、落ち込む余裕を奪い去られる。

幾度かの戦闘をこなし洞窟内を奥に進むと、3人に別れたエリアに到達した。

進むべき道がどれだか分からない…

「俺は左が怪しいと思うな!」

と、ウルフは左。

「私は真ん中が正解だと思います」

と、アルルは中央。

「うゝん…取り敢えず右から攻めませんか?」

と、ハツキは右。

自動的に決めるのはリュカ。

「別に僕はどの道でもいいよ。違ったら引き返せばいいんだし…」

「いいえ、リュカさんが決めて下さい!」

「そうだよ!戦闘は拒否ってんだから、こう言う所で活躍してよ!」

「さあ、選んで下さい!ウルフかハツキか私か!」

「えゝ…じゃあ、ハツキの選んだ道」

リュカは考えることなく選択する。

「何でハツキなんだよ!」

「そうよ!私、勇者なんですよ!」

「リュカさんは私の事が好きなんですよ!ね!?!」

不満顔のアルルとウルフ、満面の笑みのハツキ。

そしてめんどくさそうな顔のリュカ。

「別にさあ…好きとか嫌いとかじゃ無くて…オッパイの大きい人を選びました。以上!」

リュカは不平を言う3人を無視して、自分の選んだ道へ突き進む。暫くすると行き止まりになっており、其処には旅の扉と呼ばれる青く美しく渦巻く装置が存在した。

「うん。やっぱリオッパイの大きさと物事の真実はイコール関係にある」

リュカの意味の分からない納得に、納得のいかないアルルとウルフは他の通路の確認を要求する。

しかし、

「めんどくさいからヤダ！」

と拒否られ、サッサと旅の扉に入ってしまったリュカを追いかける事で断念せざるおえなかった。

旅の扉を抜け洞窟より外へ出た一行は、辺りが夜の帳に包まれている事に驚いた。

「あれ？もう、夜！？早いなあ……」

「本当ね！そんな長時間洞窟内に居たつもりは無かったけど……」

「夜動くのは危険だし、野営の準備をするか……」

リュカの提案は採用され、一行は野営の準備に取り掛かる。

新たな土地に足を踏み入れた事への感動もなく、ただひたすら休む事だけを考えるアルル達……

リュカの影響力が、それとも天然なのか……

別世界より？（前書き）

リユカがDQ3の世界で大活躍（？）をしている間も、DQ5の世界でも色々な事が起こっております。
これはそんなお話です。

別世界より？

<グランバニア>

リュカが本へ吸い込まれてから2時間程が経過したグランバニアの国王執務室では…

リュカの息子のティミーと叔父で國務大臣のオジロンが、眉間にシワを寄せて黙り込んでいる。

「……………はあ……………困ったもんだ……………」

長き沈黙の後、溜息混じりで口を開いたのはオジロンであった。

「リュカは厄介事を呼び込む体質らしい…」

「あの人が居るがぎりトラブルの種は尽きないでしょう…」

リュカは一応グランバニアの王である…

他国で大臣等が自国の王に対して、このような物言いをすれば不敬罪として処罰されるであろう！

しかしこの国の王はリュカである…

例え本人の前で言ったとしても『あはははは、1個も言い返せない』と言うだけで終わるだろう。

それが良いのか悪いのかは分からない。

それでも、この国の王であるリュカが行方不明になってしまったのは一大事なのである！

バンー！！

乱暴にドアが叩き開けられ、王妃のビアンカが入室してきた。

「リュカが本に吸い込まれたというのは本当！？」

一言で言えば不機嫌…それが今のビアンカの表情だ！

「情報が早いですね、母さん。誰が言い触らしたんですか？」

「マリーよ……」

マリーとはリュカとビアンカの次女の事である。

そのマリーがピアノカの後ろからヒョコつと顔を出す。

「はあ…マリーは誰から聞いたの？」

可愛い…既に嫁いだ妹より遙かに可愛らしい妹に、優しく問いただすティミー。

「うん、あのね…私、お父様にご本を読んでもらおうと思って、この部屋の前に居たの。そうしたらお兄様が大声で叫んでいるのが聞こえてきたのよ。だからお兄様が原因よ」

「……………母さんもマリーも他の人には言っていないですか？」

「はい！お兄様！」

「言う訳ないでしょ。それより私の事は陛下と呼びなさい！貴方、一介の兵士なのよ！貴方が身分隠して兵士になるって言ったんでしょ！自分でバラしてどうすんのよ！」

「す、済みません。王妃陛下」

「お兄様怒られちゃったね。元気出して」

ティミーはこの妹が愛らしくて仕方ない！

もう一人と違い、性格が父親に似なかった事を喜ばしく思っている。

「マリーもお兄様と呼んではダメよ！コイツはただの下っ端兵士よ！」

「！」

「はいお母様。よろしくね、下っ端さん」

ただ少し…言う事にトゲがあるのが難点だ…誰に似たのやら…

「さて、そんな事より…状況を詳しく説明して下さい」

・
・
・

「……………と言う訳で、気付いた時には国王陛下は本に吸い込まれてました…」

「その本には、その後誰も手を付けて無いのね？」

「はい。吸い込まれたく無いですから…」

ピアノカはティミーの言葉を気にもせず、本のページを捲り始める。

「あーちよつと…母さ…陛下！不用意に触っては危険です！」

「触らなきゃ調べられないでしょ！雁首並べて唸ってても、リユカは戻って来ないのよ！」

ペラペラとページを捲り本を調べるビアンカ…

「何これ！？殆ど白紙じゃない！」

「はい。国王陛下もその事に憤慨しておりました」

「で、リユカは勝手にタイトルを書き換えたのね…」

ビアンカはタイトルページに戻るとリユカが書いた『そして現実へ…』の文字を指で撫でる…

そして再度次のページを開き、中途半端に書き綴られた本文を黙読する。

その光景に違和感を感じたティミーはビアンカに近付き本を覗き込む。

「母さん…失礼…王妃陛下。国王陛下はタイトルの続きページには何も書かれて無いと、憤慨してました…ですが、今この本には内容が書かれています。中途半端ではありますが…」

「良い所に気付いたわね。さっきから見てるけど、少しずつ文字が増えてるわ…この本！」

「え！？それって…」

「そうよ。今まさに物語が進行中なのよ。そして進行させているのが…リユカ…」

それは驚愕の事実である！

人間が本に吸い込まれ、その人間が物語を紡ぎ出して行く…

「読んでご覧なさい。登場した人物の描写を…」

ティミーは2ページと書かれていない内容を読みだす。

「確かに…この口調もあの人らしい…」

ティミーには文字を読んでいるにも拘わらず脳内で、あの緊張感の欠落した声が響いていた。

「でも…それなら心配する必要は無いのでは？この物語が完結すれば、戻って来ると思いますが…」

「貴方はこの物語の結末を知ってるの？」

ビアンカの冷たく厳しい口調に、皆緊張する。

「い、いえ…結末は…」

「リュカが物語りの途中…いえ、最後でもいい…死んでしまったらどうするの？此処までを読む限り、魔王討伐という冒険の物語よ！」
ビアンカは恐怖と不安の混じった声で呟く。

思わずティミーはビアンカの顔を見つめてしまった…

青く美しい瞳にはリュカに対する心配と不安で満ち溢れている…

「では救出しないと！」

オジロンが声を震わせ叫ぶ！

「ええ、そうね。異世界へ行く方法を探さないと…ティミー、貴方はこれから特使としてラインハットへ行きなさい」

「特使…？ラインハットへ？」

「どうせ国王不在は知れ渡るわ！だから正式に世界中へ通達します。こうしておけばグランバニアへ侵略しようとしている国に対しての、対抗措置を取りやすいでしょ」

「しかし…可能な限り秘匿した方が…」

「オジロンの心配も分かるけど、何時知れ渡るか分からないと動きづらいのよ！バレないようにと制約がつきまとうから！」

「なるほど…」

「で、王妃陛下は私に何をさせたいのですか？」

「まずラインハットに知らせて軍事、政治両面で支援をしてもらいます。ラインハット以外に此処まで期待できる国はありません。それからポピーを連れてきて下さい」

「…ポピーを…混乱に拍車がかかりませんか？」

「貴方がルーラを使えばあの娘には頼りません！」

「…なるほど…ルーラ…ですか…」

「ポピーに接触したら、直ぐさまマーサ様をグランバニアにお連れして下さい。異世界への門を開くのにマーサ様のお力が必要になるかもしれません…」

テキパキと指示を出すビアンカ…

ティミーはそんな母を見て《このまま女王に就任してくれればいいのに…》と、とんでもない事を考えてしまっていた…

別に父の事が嫌いな訳では無い！

しかし、あの父の部下として日常を送っていると、時折イヤになっ
てしまうのだ…

それがリユカという男である。

「それと！…もう一つ重要な事があります」

「そ、それは？」

「この本の管理です！」

「……………何故…それが重要なんですか？」

オジロンは有能である。

ただそれは政においてであり、軍事や陰謀事には向かない。

「この本が燃やされたらリユカがどうなるのか分からないわ…」

「……………なるほど…では、どのように管理しますか？」

「この部屋ごと管理します。私とスノウとピールで指揮します。

配下はモンスターのみで構成します。私達3人の許可が無い限り、

オジロン…貴方でもこの部屋への入室は禁止します！よろしいです

ね！？」

こうして緊迫した状況のまま事態は進んで行く…

どちらの世界でもリユカだけが緊張感無く事態を受け入れている。

一番の当事者なのに、一番他人事のように…

ロマリア（前書き）

さて、いよいよロマリア編突入です。

ロマリア

<ロマリア>

アルル達がロマリアへ着いたのは、空が黄昏に染まる頃だった。
ロマリア大陸のモンスターは、アリアハンとは比べ物にならない程強く、一行の進む速度は上がらない。
それでもアルル達にたいした怪我が無いのはリュカのスカラのおかげだろう…

「やっと着いたわね…」

「…敵…強いですね…」

「疲れた…早く宿を確保しようぜ…」

アルル達若者3人は、少し離れた所で町娘をナンパしているリュカを無視して宿屋へ入る。

各人、荷物を置いたらロビーに集合。そして近くの酒場へ食事に出かける。

すると其処にはリュカが居た。

先程ナンパしていた女性とは、違う女性を伴ってイチャイチャ食事をしている。

「何であの人あんなにもてるの?」

思わずウルフはアルルとハツキに訪ねてしまう。

「……だって…格好いいじゃない!」

アルルの言葉に頷くハツキ。

男としては少し納得のいかないウルフ…

「…にしても、リュカさんの好みって胸の大きい女性?」

「その様だな。あの人、さっき口説いてた人も胸大きかったな」

「しっかり胸だけはチェックしてんの？エロガキね、ウルフは！」
ハツキのツツコミにむくれるウルフ。

「でも、だとしたら何で私には手を出さないの？」

「胸だけ大きくても、その他がガキっぽいからじゃないの？」

ハツキの嘆きに間髪を入れず突っ込むアルル。

「だとしたら、胸まで父親に似てしまったアルルには、永遠に興味を示さないでしょうね！」

「……………」

険悪な雰囲気になる少女達。

居た堪れないウルフ。

3人が黙々と食事を続けていると、軽そうなノリの青年2人がアルルとハツキに声をかけてきた。

「ねえねえ！君達この辺じゃ見かけないけど何処から来たの？」

と、男A。

「この先にスゲー旨いカクテル出す店あんだけど、一緒にいかない？」

と、男B。

彼らの名誉の為に記載しておく。

彼らはそこそこ美形である。

10人の女性に声をかけたら8人は誘いに乗るぐらい美形である。

しかし彼らの不運は、彼女らの男性基準がリユカであることだ。

「失せろ、不細工！」

ちよいキレ気味のアルルの発言。

「一緒に居る所を他人に見られたくないの！離れて下さい！」

イラついてるハツキの発言。

懷からゴールドを取り出し、勘定を終え店を出るウルフ。

店内の喧噪を見ないようにして酒場の扉を閉める…

その後の事はよく知らない…

怖くて2人には聞けない…

ただ分かっている事は、酒場が営業停止になるほどボロボロになっ

たにも拘わらず、少女達にはかすり傷一つ付いていない事である。

「そなた等がアリアハンから来た勇者達か？」

「はっ！私は勇者オルテガの娘、アルルと申します」

ここはロマリア城の謁見の間。

傳くアルル達の前に、ロマリア王とその王妃が玉座に座っている。

「よいよい…こう言う畏まったのは苦手だな…全員面を上げよ。楽にせい」

その一言を待っていたとばかりに傳くのを止めるリユカ…

その行為に、さすがに驚くロマリア王。

「ま…まあ、何だ…我が国も勇者達一行に援助をしたいのだが、そうもいかん。恥ずかしい事に我が国も苦しくてな。それに、そなた等が本当に魔王を討伐できるか分からぬから…」

「いやいや、王様！何も小遣いやるだけが援助じゃ無いでしょう！通行許可を与えてくれるだけで良いツスよ！西へ東へフリーパスってね」

本当に他国の王と謁見しているのか、疑いたくなるような口調のリユカ。

「貴様ー！！それが陛下に対する口の利き方かー！！」

もちろん激怒する家臣。

「何だよ！王様が楽にしろと言ったから、楽にしてんじゃん！アレだよ、君…王様が許可したのに、家臣がキレると王様の度量の狭さをアピールしている事になるよ。僕、他の国に行ったら言っちゃうよ『楽にしろと言ったから楽にしたら、ブチ切れた小者が納める国だった』って…ベラベラ喋るね！」

リユカは元の世界で、この様な態度で外交問題を悪化させた事が何度もある。

「ふおおおお…面白い！お主、名は？」

「リュカです」

「うむ、リュカよ！余もざつくばらんに話そう。実はな…勿体ぶつたのは、やってもらいたい事があったからなのだ！その為に『援助できん』などと言ってしまったのだ…」

「まあ、こう言うのは駆け引きですからね」

「我々に来る事であれば何なりと！」

リュカのやり取りに胃が痛くなってきたアルルは、リュカが何か言う前に引き受ける事を了承する。

「うむ。カンダタと言う盗賊団が我が国の『金の冠』を盗んだのだ！それを取り返して来てほしい」

「見事取り戻せたなら、褒美を取らせましょう」

王妃がリュカを見つめ妖しく微笑む。

「別に人の女に興味ないから、褒美と言われても…ぐふっ！」

とんでもない発言をするリュカの鳩尾に、アルルの拳がめり込む！

「ご褒美を戴くまでもなく、全力を尽くさせて頂きます！では、早速行つて参ります！」

蹲るリュカを引きずるように、アルル達は謁見の間を後にする。

「信じらんない！私、胃が痛くなつたわよ！」

「まあまあ…落ち着いてアルル」

「そうだよ。リュカさんらしかつたじゃん！」

早々に宿屋へ戻った一行は、リュカを囲み騒ぎ出す。

「リュカさん！不敬罪って分かります！？重いんですよ！！」

「言葉の意味は知ってるけどさあ…でも、僕の国ではあんなもんだよ。不敬罪になった奴いないよ」

「何ですか、そのネジの緩い王様は！」

「あはははは、1個も言い返せない」

笑っている場合じゃ無いはずなのに、大爆笑のリュカ。本当、ネジ

が緩いのかもしれない…

「なあ、アルル。安易に金の冠奪還を受けたけど、カンダタって奴が何処に居るのか分かってるのか？」

「こ、これから情報を集めるの！」

ウルフの冷静な指摘に、焦りまくって答えるアルル。

「僕知ってるよ」

そして何故か情報だけは持つているリユカ。

「此処から北西の山脈の向こうに『シャンパニーの塔』があつて、其処がアジトらしい」

「……………情報源は？」

聞くまでも無い事なのだが、聞かずにはいられないハツキ。

「うん。昨晚、一緒に食事した娘がベツトで教えてくれた。因みに山脈越えはきついから、一度北の『カザーブ』という村に寄つてから迂回した方が良いってさ！」

「じゃ…じゃあ、目的地は決まったわ！出発は明日早朝ね！今の内に装備を揃えておきましょう！」

若者3人は装備を一新する為城下を彷徨い、リユカは今宵のお相手求め城下を彷徨う。

新たな装備は手にはいるのか…

新たな情報は手にはいるのか…

新たな命を紡ぐのだけは勘弁してほしいものである…

ロマリア（後書き）

次回、新キャラ追加です。

5人パーティーになっちゃうけど、

まあ…細かい事は目を瞑って下さい。

商人

<ロマリア領>

首都ロマリアから北へ進むと、木々の生い茂った険しい山道が続く。昨今ではモンスターのみならず、山賊も出没する危険な道。

アルル達は襲い来るモンスターを撃滅しながら突き進む。

彷徨う鎧や軍隊がに、キラービーなど…

敵は強くアルル達は苦戦の連続である。

しかし若さのおかげか、一戦毎に実力は向上している。

日も暮れかけ野営の準備に取り掛かると、不意にリュカが辺りを気にし始めた。

「悲鳴が聞こえた!」

「「「え!?!」」」

リュカの一言にアルル達も耳を澄ます。

・
・
・

「何も聞こえないわよ…」

「いや…美女の悲鳴だ!」

「何で悲鳴だけで美女だと分かるんだよ!」

ウルフのツツコミを無視して、森の中へ走り出すリュカ!

「ちょ、待ってよ!」

慌ててリュカを追いかける3人。

「キャー!?!?!」

「ガタガタうるせー! いい加減観念して犯されろ! 気持ち良くして

やつからよお」

4人のごろつき風の男達が、1人の女性を押し倒し手足を押さえ付けている。

「あんた等ウチのボディーガードやろ！そう言う契約やったやん！」

「馬鹿かねえーちゃん！あんな端金で雇われると思ってるのか？」

「ぎやはははは！謝礼はオメーの身体だよ！」

男の一人が女の服を破り取る！

「キヤーー！！」

「へへへ、顔はガキっぽいが体は最高だな！」

破り取られた胸元から、かなりの大きさの胸がこぼれ出る。……

巨乳です！

「イヤー！！」

「ここは通常の街道からはかなり外れてんだ！人なんかこねーよ！騒いでねーで、大人しく楽しめよ。最高の時間にしてやつからよ！」

男は徐に女の上に被さり行為を始めようとした、その瞬間……

女の上で四つん這いになっていた男が、大きく吹き飛んだ！

そして他の3人も訳も解らず身体に強い衝撃が走り、後方へ吹き飛ばす！

「美しいお嬢さん。無事ですか？」

衣服がボロボロの女性に、自分のマントを羽織らせ優しく問いかける男、リュカ。

「あ……ああ、平気や……犯される寸前やったけど、まだ処女や。」

それを聞いて優しく微笑むリュカ。

女の方もパニックからか、リュカの魅力なのか分からないが、必要な情報まで伝えてしまってる。

そしてようやく追いついたアルル達3人。

「本当に美女の悲鳴だったんだ……」

呆れ感心するウルフ。

「しかしよくこんな遠くの悲鳴が聞こえたわね！」

呆れ驚くアルル。

「美女の悲鳴だったからね！そうじゃなきゃ聞こえないよ」

「悲鳴に美女も何もないでしょう……」

呆れ疲れるハツキ。

そこへ、ごろつき4人集が復活し戻ってきた。

「テメー！不意打ちとは卑怯じゃねーか！」

「か弱い女性を、男4人がかりで襲ってるヤツらに言われたくない！」

「うるせー！ぶっ殺してやる！」

「おい、よく見りゃいい女を2人も連れてるじゃねーか！」

「へへへ……おい、にいちちゃん！命が惜しかったら女置いて消えな！」
ごろつき4人集は各々武器を手近付いてくる。

「お前等こそ、武器を捨てて消え失せろ！相手するのが面倒だ！」

「てめー、ぶっ殺してやる！」

「それ、さっき聞いた。他にボキヤブラリーは無いの？」

リュカの安い挑発に、カツとなった1人が襲いかかる！

しかし次の瞬間、男の頭はリュカの杖に吹き飛ばされた。

頭部の無くなった体から、勢い良く血が噴き出し辺りを染める。

ごろつき4人集は、ごろつき3人集となり目に見えて怯んでいる。

「テ、テメー……お、俺達が誰だか知っててやってんのか！」

「え！？何？有名な人の？じゃあ、サイン貰おうかな！……ペンが無いから、お前等の血をインク代わりにするけどね！」

脅し文句と共に、1歩踏み出すリュカ。

「お、俺達は、カンダタ一味だぞ！カンダタ親分がオメー等をぶっ殺すぞ！」

腰が引け、声が裏返る男を見てリュカは更に脅しをかける。

「さっきお前等が言ってたろ！ここには人が来ないって。」

「だ、だからなんだよ！」

「誰がカンダタ親分にチクルの？お前等全員ここで死ぬんだから、チクルないでしょ！」

リユカが満面の笑みでごろつき3人集に近付く。

そして……………

「ホンマ、危ない所を助けて頂きありがとう。ウチはエコナ。まだ駆け出しやけど商人や！」

一行は当初の野営場所へ戻り、自己紹介から始めた。

エコナは大商人になる為、世界を旅し修行している駆け出し商人だ。

「ほな、おたく等が勇者様ご一行なん？」

「まあ…便宜上は…」

「ほんなら、ウチも一緒に付いていつてええか？ウチ、目的地があるわけじゃないねん！ただ世界中を巡って、見識を広めたいねん！」
「それは構わないけど、私達の旅はとても危険なものよ！それでもいいの？」

「心配無用や。さつきみたいに4人がかりじゃムリやけど、ウチとて多少は戦えるんや！…それにリユカはんと一緒の方が安全そうやん！」

先程リユカの強さを目の当たりにしたエコナ。

「まあ…そんな訳や。よろしゅうたのんます」

「ところでリユカはん。ウチ、服がボロボロやん…代えの服も無いし、カザーブまでマント貸してほしいねんけど、それじゃリユカはんも困るやん」

「いや、別に「ほんでな、二人抱き合っていればマントを二人で使えると思うねん！」

エコナはここぞとばかりにリユカに色目を使い、落としかかる。リユカを無料のボディガードに仕立てるつもりだ。

「いいね！も、ぎゅーっと抱き合っていようか！」

「良くありません！私の代えの服を使つて下さい！」

「アンタのじゃ胸がきつそうで着られへん」

差し出されたアルルの服を見て言い切るエコナ。

「じゃあ、私を使つて下さい！絶対着れます！」

ハツキは強引に服を渡してエコナをリユカから引き離す。

《男はここにもう一人居るのに、何で俺は相手にされないんだ？》

ウルフが女3人のやり取りを憮然と見つめていると、マントを返してもらったリユカが小声で話しかける。

「ウルフ。女の子に相手してほしいのなら、自分から声をかけないとダメだよ。待ってたって何も起きないよ！」

はたしてウルフは、どんな大人になるのか楽しみである。

商人（後書き）

新規参入キャラの口調について…

今回より新キャラ『エコナ』が登場しましたが、

彼女は大阪弁風の口調をしておりますが、

あくまで『風』…つまり似ているだけです。

「そんな喋り方ない！！」とか「バカにしてるのか」などと言うクレームは、

一切受け付けております。

何度でも言いますが、大阪弁風だけで大阪弁ではございません。

また、方言をバカにする目的で書いてるつもりはございません。

万が一その様に感じられたのなら、それは作者の表現力（力量）不足によるものです。

御不快感をあたえた旨、深く陳謝致します。

蛇足ですが、

エコナはフレアさんレベルです。（例のアレが！）

カザーブ

<カザーブ>

「前も後ろも山ばっかー」

リュカが勝手な歌を歌いたくなる様な村：カザーブ。
リュカの歌通り四方を山で囲まれている。

アルル達は着いて早々、エコナの装備を揃える為、武器屋や道具屋をハシゴする。

「なあなあリュカはん！これなんてどう？ウチに似合う？」

「うーん：折角胸が大きいんだから、もっと胸を露出した服はどう？僕はそっちの方が好き」

「ほな：これは？」

休日のショッピングモールでキャツキャウフフとイチャつくバカッブルの如く、リュカとエコナはショッピングを楽しんでいる。
それを恐ろしい形相で睨むアルルとハツキ。

更にウルフは女の扱い方の手本としてリュカの言動をメモしている。

（大丈夫か？）

「早くしなさいよ！日が暮れちゃうでしょ！」

「ウチ等には気をつかわんでええよ：アルル達は先に宿へ戻ってて下さい。ウチ等はウチ等で勝手にやりますから」

「うん。自由行動ね」

そう言つてリュカとエコナは別の店に入つて行く。

二人きりにしたくないアルルとハツキは、渋々ついて行く。

ウルフは：言うまでもない：

一通りの物を揃えたエコナは、リュカを伴い村の酒場でディナーデートを敢行する。

だがアルル達も一緒の為、どう見てもただの食事会である。

大して広くない店内には、若いカップルが先客として食事をしている。

5人はテーブル席に座る。

「ウチは取り敢えずビール！みんなは？」

ほぼ座ると同時にエコナは叫ぶ。

「私達は未成年です！お酒は飲みません」

「ウチかて18や！気にしたら負けやで。リュカはんは飲むやろ？」

「お酒嫌いだからいい！」

リュカは表情を渋らせ拒絶する。

「リュカはん、飲めへんの？」

「うゝん…飲めるけど、強くないし…良い思い出が無いから…」

「何や？そのやな思いでって！酔って上司殴ったん？」

下世話な話に興味津津のエコナ。

エコナ程では無いが聞きたがっている他3人。

「うん…実はね…僕に初めての子供が産まれた日に、以前から準備されていたパーティーがあっただんだ…しかも僕が主賓の…本当はパーティーなんて出たくなかったんだけど、出ない訳いらないじゃんで、イヤイヤ出席して無理矢理酒飲まされて、気が付いたら気絶してて奥さんが魔族に攫われてた…」

リュカの話は続く…

身内に居た裏切り者の事、その後8年間の石像化、生まれたばかりの双子は8年間も両親が居なかった事…

孤児として育ったハツキとウルフ、そしてやはり孤児のエコナはリュカの子供に共感を覚え涙する。

アルルもリュカの人生の壮絶さに言葉も出ない…

「おいおい…泣くなよ…今はもう幸せだよ。みんな…」

「そか…子供は親と一緒に暮らすのが一番幸せや!」

「うん。そうね!早くバラモスを倒して、世界を平和にしないとね!」

「あの…すみません…」

アルルの言葉を聞いた隣席のカップル(女)が、不意に話しかけてきた。

「バラモスを倒すという事は…貴女達は勇者様ですか?」

「べ、便宜上は…」

たじろぐアルル。

「ではお願いがあります。ここより北に行った所にある『ノアニール』と言う村をお救い下さい!」

・
・
・

カップル(女)の説明では、10年程前から村人が皆眠ってしまう呪いにかかっているらしい。

何故呪いがかかっているのかは分からない様です。

カップル(女)は幼い時に父と共に村を出たが、弟が村で長き眠りについている…

「お願いします!どうか弟を…」

泣きじゃくりながら懇願するカップル(女)…

「わ、分かりました…ひとまず調査を試みますから…」

辟易するアルル…

一行は逃げる様に宿屋へ戻り、作戦会議を始める。

「どうすんだよ。カンダタから金の冠を取り返す途中だろ!」

「分かっているけど…ほっとけないでしょ!」

「じゃあ…どちらから先に行きますか?」

「そんな簡単やん!寝ぼすけ共にはもう少し寝ててもらって、先にカンダタや!カンダタは遠くに逃げてしまう可能性もあるかもし

れへん」

「じゃあ決まりね！明日早朝にシャンパニーの塔を目指します」
話が決まった所でリュカが口を開く。

「どうして僕の部屋で作戦会議してるの？」

「だって…他の人の部屋じゃ、リュカさん会議に出席しないでしょ？『僕は決まった事に従うよ』って言うて！」

「うゝん…そうだね。でも、僕が居たって会議に参加しなければ同じじゃない？」

「そんなことはないわ！後で説明するのは面倒なの。一緒に居れば説明を省けるでしょ！」

「なるほど！納得しました。…もう会議終了だよ。解散だよ」

「ええ…お疲れ様…」

「じゃあ、僕…散歩してきます」

「ちよつと！明日は早いのだよ！寝不足じゃ困るんだけど！」

「あはははは、大丈夫だよ！僕は戦わないから！寝不足OKでしょ！じゃあね」

各自が自分の部屋に戻る中、リュカだけが宿屋から外出して行く。

阻みたいが阻む手立てがないアルル…

恨めしそうにリュカの背中を見つめ、大きく溜息を吐く…

自分の部屋に呼ぶ事が出来れば、どんなに嬉しいかと…

翌早朝…

一向に起きてこないリュカとエコナを起こすべく、3人は二人の部屋に突入する。

リュカの部屋はもぬけの殻…

仕方なくエコナだけでも起こそうと、部屋を大きくノックして中に突入すると…

裸のエコナが裸のリュカに重なる様にして寝ていないか！

「な…な…何してるんですか…！」

「やあ…おはよう…もうちょっと静かにしようよ…周りに迷惑だよ」

「ホンマにねえ…もうちょい静かにしてほしいわあ」

この状況を見られても気にしない2人…

それどころか優雅に目覚めのキスをしてから仕度を始める2人…

「いいなあ…」

ハツキが小声で羨ましがる…

間違った道に進んでいる事に気付いてほしいものである…

カザーブ（後書き）

またかよ、この男！
状況分かってんのかよ！！

シャンパニーの塔（前書き）

久しぶりにリュカがぶち切れます。

シャンパニーの塔

<カザーブより南西>

潮風が心地よい平原をモンスターの雄叫びが轟く。

毒いもむしにギズモ…

襲い来る敵も強力になって行く…

しかしアルル達も成長著しい！

アルルがメラを唱え、ハツキが憶えたてのバギでとどめを刺す。

敵の数が多ければ、ウルフがギラを唱え蹴散らす。

新メンバーのエコナも、鉄の槍で敵を葬り去って行く。

5人パーティーで、1人何もしないのは何時もと同じ…

それでもエコナの参入でフォワード要員が増え、パーティーバランスが向上した事は喜ぶべき事だ。

「お！？見えて来たでー！アレがシャンパニーの塔や」

カンダタ一味が根城にしている塔…

強い潮風に晒されながらも、威風堂々とそびえ立つその塔に、一行は進入する。

<シャンパニーの塔>

塔の内部は何処からともなく腐敗臭が漂っている。

「この匂い…何？」

アルルは顔を顰め、ハツキはいまにも吐きそうだ。

怪訝な表情で進むリユカは、塔の片隅の部屋で不愉快な物を発見する。

其処には大量の死体が無碍に放置されている場所…

「な、何これ…！」

「何でこんなに死体があるんだ？」

100体は超えているであろう死体の山…

既に白骨化しているものから、腐敗の著しいもの…

先程捨てられた様な死体まである。

死体の7割はロマリアの兵士と思しき恰好だが、残りはどう見ても兵士ではない。

中には衣服を引き裂かれ、レイプされた形跡のある女性の死体や、年端もいかない少女の死体…

「酷い…」

あまりの光景に言葉を失っていると、部屋の奥から人の息づかいが聞こえてくる。

「奥に誰か居る様だ…」

リュカが声のする方へ進み行く。

其処には更に不愉快な事を行っている男が1人いた。

まだ6・7歳の少女を犯す男…

その少女も今は息がない…

だが、つい先刻まで生きていたのであろう…

多くの男に犯され息絶えた少女を、ここに捨てに来た…そしてこれで最後とばかりに欲望を少女の死体へぶつけている…この男のしているのは、そんなところだろう！

「いい加減にしろ！」

リュカが男の脇腹に強烈な蹴りを入れる！

「ぐはあ！」

大量の血と共にその日の食事を全て吐き出し男が唸る。

「な、何だ…デメ…!?」

「うるさい！貴様に名乗る名前はない！カンドタはこの上に居るの

か!？」

「へへへ…お前等もロマリアに頼まれた連中か…サッサと上に行つてぶつ殺されてこいよ!そっちの女3人も犯されまくって死体になったら俺が抱いてやるぜ!」

リユカは徐に男の頭を鷲掴みにすると、そのまま力を込めてゆく!「うぎやああああ!」

(ぐしゃ!)

腐ったリングを握り潰すかの様に、リユカは男の頭を握り潰した!そしてリユカは黙って歩き出す。

アルル達は慌ててリユカに続く。

リユカの怒りが伝わってくる為、無言のままついて行く。

塔を上へ進む中、カンダタの子分達がリユカを見つけ襲いかかつてくる。

アルル達は素早く臨戦態勢をとろうとするが、剣を抜く間もなくリユカが敵を蹴散らし、戦闘が終了する。

目の前で目撃しても、リユカが何をしたのか分からない程一瞬で…

《何なのこの強さ…強いとは思っていたけどこれ程とは…》

アルルだけではない…他の3人もリユカの強さに驚かされるばかりだ…

最上階へ着いたリユカ達は、まさに歪んだ欲望の宴を目撃する…

2人の女性を15人が代わる代わる犯しているところだ!

「あ…?何だテメー!何処から入って…ぐはっ!」

15人いた裸のブ男達は一瞬でこの世から消え去り、奥の部屋からカンダタらしき大男が姿を現す。

「な、何だこりゃ!?!?どういう事だ!」

「お前がカンダタか?」

「そう言うテメーは誰だ!?!」

「そんな事どうでもいい…金の冠を返せ!そうしたら一瞬で殺して

やる！」

室内の状況を見定めたカンダタは、慌てて奥の部屋に引き戻りドアに鍵をかける。

リュカは勢い良くドアにタックルするも、意外に丈夫でなかなか突破できない！

「リュカさん退いて！」

ウルフがリュカに退く様に指示する。

「イオ」

そしてドアに向けイオを唱えた！

（ドカーン！）

ドアは吹き飛びリュカが突入する！

まず正面に見えたのは、窓の外で両手を縛られ宙吊りになる裸の女性：

その女性の頭には金の冠：

女性の両手を縛り吊すロープは、室内を通って部屋の反対側の窓辺に立つカンダタの手に：

「おっと！俺様はキメラの翼を使って逃げさせてもらう！俺の事よ、女を気にした方が利口だ！じゃあな！」

そこまで言つとロープから手を放しキメラの翼で飛んで行く…

女性は支えを失ったロープごと地上に落下し始める！

慌ててロープを掴むリュカ！

「くっ！何てヤローだ！」

女性は2メートル程落下したが、リュカのおかげで大事は免れた。

ひとまずは女性達に衣服とキメラの翼を渡し、各々先に帰らせた。

「カンダタ…逃がしちゃったね…」

「でも、金の冠は取り戻したわ！これでロマリア王に報告できるわ

よ」

アルルは出来る限り明るい口調でみんなに話しかける。
しかしリュカは、一人静かにカンダタの逃げた空を見つめ物思いに耽る。

アルルもハツキもエコナも…何を話しかけていいのか分からない…でも、何時ものリュカに戻ってほしく、全てをウルフに押し付ける！
《な、何で俺なんだよ…》

「な、なあリュカさん…俺…リュカさんが怒るの初めて見たけど…1階に居た女の子とは知り合いなの？」

振り返ったリュカの表情は何時もの優しいリュカだった。

「僕にもあのくらいの歳の娘が居るんだ…とっても可愛いんだよ」
優しくウルフの頭を撫でるリュカ。

自分の娘と重ねてしまい、激怒する姿を見た少女達…

その底知れぬ優しさに、更に恋心を深めて行く。

悪循環であるにも拘わらず…

裸の付き合い

<ロマリア領・北部>

アルル達はリュカを囲み武器を構えている！

「はぁ！」

アルルは剣で一閃！

（キン！）

「甘いよ」

しかしリュカに難無く弾かれる。

「メラ」

「バギ」

ウルフのメラもリュカのバギで相殺される。

「いくで！」

「おっと！」

エコナが鉄の槍で突くも掠る事すらしない。

「マヌーサ」

ハツキがマヌーサを唱えるも、呪文の効果は全くない。

・
・
・

「うん。みんな強くなったね！ただもう少し連携して攻撃した方がいいよ」

4対1でリュカを攻撃したにも拘わらず、リュカは息を切らさず何時もと同じ口調で語りかけてくる。

アルル達は激しい運動量のせいで、喋る事も出来ず座り込む。

リュカはアルル達に頼まれ、完全な実践形式での手合わせを行った。手加減無し（アルル側）の手合わせだった為、魔法も当たれば怪我

を免れなかっただろうし、物理攻撃も当たれば大怪我をするレベルの手合わせだった…当たればだが…

「さあ、ご所望通り一斉に手合わせをしたよ。僕もう疲れたよ！今日はこの辺で野営で良いよね！？」

「…ええ…」

ぐったりしているアルルは、何とか体を起こしリュカの質問に答えた。

「じゃあ僕はご飯の準備に取り掛かるね！そう言えばすぐ其処に小川が流れているから、女の子達は水浴びでもしてきたらどう？大丈夫、覗かないよ！それにウルフが覗かない様に見張ってるよ」

『俺だって覗かないよ！！』

と、突っ込みたいのだが疲れきって突っ込めないウルフ。

何とか体を起こし、着替えとタオルを持って小川へ歩く少女達。

「本当…リュカさんって凄い体力ね…私達がこんなに疲れる程攻撃したのに、汗一つかいてない…」

「まったくや！ベットのの上でも凄かったで！」

「止めて下さい、いやらしい話をするの！」

年頃の女の子が3人集まれば、自ずと話の内容は決まってくる。

「…でも、どうしてリュカさんと…ああ言う状況になったんですか？」

「なんや、ハツキは気になるん？いやらしい話は嫌いなんじゃないん？」

「…い、意地が悪いです！」

「まあええ…ウチな、利用しようと思ったんよ。」

「利用？リュカさんを！？」

「色仕掛けで迫って、ウチの無料ボディガードとして側に居させようと考えてたんよ！」

エコナは豊満な胸を両手で持ち上げ、体ごと左右に振りながら話す。

「ほんで、リュカはんが一人で村を歩いているのを見つけたから、改めてお礼をしたい言って話しかけたんよ！」

アルルもハツキも黙って聞き入る。

「そしたら『別にお礼なんていいよ。下心ありで助けたんだから』って爽やかに笑いよるねん！普通言わへんよ、下心ありなんて…だから聞いたんよ『下心ってなんですう』てな。」

「そうしたら何て答えたの？」

「ごつつあつさりと『うん。エツチ出来ればいいな』って笑いながら答えるねん！ウチも最初は処女を守るつもりやったんけど、あの笑顔に落ちてもうた！気付いたらリュカはんに抱き付き、キスしてたんや…」

エコナは自分の体を抱き締め、クネクネしながら語る。

「あの男ズルイねん！他の飢えきつた男みたいに『やらせろ！』って、がつついて来ないクセに、自身の欲求はストレートに話すねん！しかも最高の笑顔付きで…」

……
幾ばくかの沈黙が流れる…

「リュカさん…格好いいわよね…シャンパニーの塔でも…」

アルルはシャンパニーの塔でのリュカを思い出す。

「怒ったリュカさんは怖かったですけど…優しいからこそ、あんなに怒ったんですね…」

ハツキの言葉に皆頷く。

「奥さんて…どんな人なんやろ…？」

「リュカさんが言うには、すごい美人だそうですよ。奥さん以上の美人に出会った事無いって言っていました…」

「ウチ等かてそう悪くないと思うで！」

「リュカさん…元の世界へ帰っちゃうのかな…？」

「…」

アルルの一言に黙りだす。

「させへん！ウチが色仕掛けで落として、この世界に居たいと思わ

せる！」

「私も協力します！」

エコナとハツキが手を組む！

「アルルはええんか？リユカはん帰っても！」

「……私は……そう言うのイヤ！」

「「そう言うのって？」」

キレイにハモるエコナとハツキ。

さすがにちよつと照れくさかった様で、顔を見合わせ苦笑い。

「色仕掛けよ！私もリユカさんには帰ってほしくないよ！でも、この世界を気に入って帰らないのなら歓迎だけど……女の為にとって言うのはイヤ！それに元の世界には家族が待っているのよ……家族の事を思うと……」

「アルルの言い分も分かるけど、ウチは誘惑を諦めんよ。アルルに手伝えとは言わへんけど、邪魔だけはせんといてね！」

《でも……きつと無駄よ！リユカさんが色仕掛け程度で落ちると思えない……まあ、誘いには乗るでしょうけども……》

奇妙な連帯感が生まれた、かしまし三人娘。（古っ！）

リユカは無事元の世界に戻るのか！？

それより、戻った後が無事ですむのか！？私はそれが心配だ！

「ハツキ達遅いね……」

「じゃあウルフ！『遅くて心配になっちゃった？』とか言って見てくれば」

「殺さるよ！」

「平気だよ。裸の一つくらい見られても」

「リユカさんにはね！」

「みんなの事が心配だったって言えば大丈夫だよ！何だったら、足が滑ったとか言って押し倒しちゃえば？不可抗力なんですぅ……って」
男共は男共で、しょうもない話を続けている……

このパーティーの男女間の温度差は、結構深刻なものかもしれない…

リユカが居なければ、もっとまともな冒険が出来たであろうか？

裸の付き合い（後書き）

サブタイトルからエッチな内容を想像したアナタ！

……………仲良くなれそうですね。

今のところ、パーティー内で手を出した女性は1人だけ…
奇跡みたいな数字ですね！？

ノアニール

<ノアニール>

「ここがノアニール…」

溜息を吐き周囲を見渡すアルル。

人々の生活が途絶え、草木が鬱そうと生い茂る村…

その村の各所に横たわり眠り続ける人々…

「何故…こんな事に…？」

「なあ…ここにいたら俺達も目覚めなくならないのか？」

「それは大丈夫じゃ！」

ウルフの疑問に答えたのは、一人の年老いた男性だった。

「僕は皆が眠りについてから10年間、この村で生活をしておるが、呪いの影響を受けた事はない」

「あ、貴方は？…どうして貴方は呪いにかからなかったのです？」

「うむ。僕はイノック。生まれも育ちもこの村じゃ…僕が呪いにかからなかったのは、村に呪いがかかった時にちょうど居なかったんじゃ…家出した息子を捜す為、村の外に出ておった…」

イノック老人は切々と語る。

エルフの姫と恋に落ちてしまった息子ノイル。

エルフの娘は、エルフの里を捨てノアニールに…ノイルの元にやって来た。

しかし村人はエルフの魔力を恐れ、迫害をした…

一緒に住んでいたイノック老人にも被害が及び、居たたまれず息子にエルフと別れる様説得。

しかしノイルは受け入れず、エルフの娘と共に村を出て行ってしまった…

当初は行く当てなど何処にもない息子の事だから、すぐに帰って来ると思っていたが、1週間たっても戻る気配がなく、心配になり近

隣の村や町を探し回ったイノック老人。

2ヶ月探し回ったが消息すら掴めず、ひとまず村へ帰ると、この有様だった…

「どうか旅の方… エルフの隠れ里に行つて、エルフの女王を説得してはくれませぬか…」

アルルに縋り付く老人。

「勝手な事言うな!!」

静かな村内にリュカの怒号が響き渡る!

「アンタ親だろ! 息子が連れてきた彼女を認めないなんて… アンタが息子達を認め… 応援してやれば、こんな事にはならなかったんじゃないのか!？」

「し、しかし… エルフですぞ!」

「それがどうした! エルフが何だ! 種族の違いがどうした! ! アンタは自分の事しか考えてない! 他の村人に白い目で見られるのがイヤで、別れる様に言っただんだろ! 息子の幸せなんて考えもせず、愛し合う二人を引き裂こうとしたんだ!」

「エ、エルフと人間で… し、幸せになど…」

「やってみなければ分からないだろ! アンタ、二人の馴れ初めを聞いた事あんのか?」

「……………」

答えようとしないイノック老人…

「ふん! やっぱり… 二人がどれくらい愛し合っているか、どうして惹かれ合ったか知りもしないで… どうしてそれで、幸せになれないって言い切れるんだ!？」

「リュカさん… それくらいで…」

堪らずアルルが止めに入った。

「…確かに… 不幸になるかもしれない… でも、自分たちで選んだ道だ! 他人の言いなりで幸せになるよりも、自分で決断して不幸になった方が…」

「アンタに何が分かる…」

イノック老人が絞り出す様に呟く。

「分かるね！僕にも息子が居る！とても真面目な良い子だが、どこか抜けてる感がある息子だ。いつか、どっかのバカ女に騙される様な気がして、ワクワクしてるさ！でも絶対、『別れる』なんて言わない…僕は息子を…ティミーを信じてる！アイツはきっと良い女を連れてくるって…」

リユカは嬉しそうに、自分の息子の事を語っている。

それをイノック老人は見る事が出来ない…自分の息子を信じる事が出来なかったから…

アルル達は村の宿屋を勝手に借りて、今後の事を話し合っている。

「取り敢えず…エルフの里に行ってみましょうか…」

「でも、会ってくれますかね？いきなり攻撃されませんか？」

「それは分からないけど…でもこのまま、ほっとく訳にもいかないし…」

アルルの溜息混じりの提案に、リユカは何も言わない…

視線を向けても優しく微笑むだけ…

「あの…リユカさんは…この村を救うのに反対じゃないの？」

恐る恐るウルフが訪ねる。

「（クス）反対なんかしないよ。さっき怒ったのは、息子の幸せを考えていないジジイに対してだよ。まあ…エルフを迫害した村人達にも、少しは腹が立つけど…誰しも自分たちと違う存在は怖いんだよ……でも、こっちの世界じゃエルフって怖い存在なの？」

「リユカさんの世界じゃ違うの？」

「そうだよ！エルフだよ！人間より遙かに長生きで、とてつもない魔力を持っているんだよ！人間なんて一瞬で滅ぼしちゃうよ！」

ウルフは興奮気味にエルフについての風聞を披露する。

それは、この世界の人々が古くから言い伝えてきた事であり、何ら

確証に基づくものではない。

「でもウルフ……まだ滅ばされてないよ。この村も……人間全ても……」

「それは……その……」

リュカは優しく微笑みながらウルフの頭を撫でる。

「そんな思いこみだけで敵対しないでさ、仲良くなる努力をしようよ。……エルフの里かぁ……楽しみだなぁ」

「？……リュカはん……何が楽しみなんや？ウチ、少しばかりビビってるで！」

よく見るとアルルとハツキも、エルフへの恐怖で表情が若干引きつっている。

しかしリュカは気にすることなく語る。

「エルフってさぁ……美人が多いんだよねえ。しかもエルフは男の子の出産率が低いんだって！まあその分長寿でカバーしてるみたいだけど……」

「そのの何が楽しみなの？」

「つまりだ、ウルフ君！そのエルフの里は美女だらけって事だよ！僕の知り合いのエルフも、頭は緩いけどすごい美人だもん！」

常人とは異なる思考回路でものを語るリュカ……

下手に手を出したが為に、物事が厄介にならないか、不安になる4人……

トラブルの予感はいきません。

<ノアニールより西の森>

一行は翌早朝にノアニールを出発し、一路西へ……エルフの隠れ里を目指す。

大勢の美女に出会える事を期待するリュカは、一人ウキウキ気分で『恋のバカンス』を歌い、いつもの様に敵を呼び寄せる。

現れたのは『バリイドック』と呼ばれる、犬のアンデットが4匹。
「あ！ワンコだ！…でも腐ってる。臭いがきついなあ…」

素早く臨戦態勢に入るリュカ以外の4人。

しかし先制したのはバリイドックだ！

バリイドックが遠吠え！

アルル達の体が淡く光る…

「『ルカナン』だ！気を付けろ！」

何故だか動物の言葉が分かるリュカが、アルル達に注意を促す。

それを聞き、ウルフが『スクルト』を唱え、守備力を上昇させた。

「ナイス、ウルフ！じゃあ私も、バギー！」

しかしハツキのバギは効果が薄く、バリイドックにダメージを与えられない。

「ギラ」

続いてアルルがギラを唱える。

真つ赤な炎がバリイドック達を赤く包む。

1匹のバリイドックが炎の中から飛び出し、アルルに襲いかかる！

「甘い！」

だが、アルルの遙か手前でエコナに鉄の槍で突かれ絶命した。

ひとまず戦闘も終わり、再度エルフの隠れ里へと足を進める一行。

ハツキが落ち込んでいるのに気付いたリュカは、彼女に近付き声をかける。

「どうしたのハツキ？何か落ち込んでる？さっきバギが効かなかったから、落ち込んでる？」

「私…全然みんなの役に立ってない…」

「そんな事無いと思うよ。アルルが怪我したらホイミで治してるじゃない！」

「でも、私じゃなくても…アルルだってホイミ使えるし、リュカさ

んなんかはベホイミを使えるじゃないですか！本職の僧侶の私はホイミしか使えないのに……」

「でも回復役は多いに越した事はないよ！それに僕を当てにしないで……常に逃げる準備で忙しいから」

リユカは戯けて見せるが、ハツキは俯き表情は暗いまま……

「アルルのギラ、見ました！？本職のウルフと同じくらいの威力ですよ！それなのに……私のバギは……」

「あのねハツキ……アルルは勇者様なんだよ。何でも出来る……それが勇者様なんだよ」

「何でも……やっぱり私……いらないですよ……」

「何でも出来る人間っていうのはね、一人じゃ何にも出来ない人の事なんだ。」

「え！？何でも出来るのに？」

ハツキは顔を上げリユカの瞳を見つめる。

「うん。腕力はあるが戦士程じゃない。素早く動けるが武闘家程じゃない。攻撃魔法を使えるが魔法使い程じゃない。もちろん回復系の魔法も使えるが僧侶程じゃない。いいかいハツキ……落ち込むなどは言わない……でも『自分は役立たずだ』って落ち込んでも、何も解決はしないよ。それより『どうすれば役に立てるのか』って悩んだ方が有益だ！」

「……私に、何が出来ますかね？」

リユカの言葉を聞いて、ハツキの瞳に輝きが戻る。

「さあ……僕には分からない……色々試してみるんだね……何か答えが出てくるよ」

人に聞く事では無い……自分の未来は自分で見つける！

リユカの答えは優しくも厳しい。

ハツキなりに答えを見つける事が出来る様、祈るのみである。

ノアニール（後書き）

珍しくリユカがまともな事を言ってますが、一応素面ですので驚かないで下さい。

エルフの里

<エルフの隠れ里付近の森>

「なあ…俺達…迷ってないか!？」

ウルフが額に流れる汗を拭いながら訪ねる。

「大丈夫、迷ってないよ。僕達は美女の群れに近付いてるよ」

「本当かよ!何だか同じ所をグルグル回ってる気がするけど!？」

「本当本当!だんだん美女の匂が強くなってるからね!」

「…なんだよ、それ……じゃあ、その匂いを辿ってみてよ…もう疲れた…」

リュカの言い分に、心身共に疲れ切ったウルフが、やけくそ気味に嫌味を言う。

「ようし!任せなさい!!」

だがリュカは、気にしないどころか率先して森の奥へ勝手に進んで行く。

置いてかれる訳にはいかないアルル達も、慌ててリュカの後について行く。

<エルフの隠れ里>

どンドン進むリュカの後を、見失わない様について行くと、急に拓けた場所へと出る事が出来た!

「……………本当に着いちゃった…」

「だから言っただろ!美女の匂いがするって!」

「何だよ、美女の匂いって!?どんなんだよ!」

「そりゃアレだよ!美人…って感じの匂いだよ!」

リュカの説明になってない説明で、ウルフはより混乱する…

そんな男二人を無視して、アルル達は村内へと入って行く…そこは…
「ほ、ホンマに美女だらけやん…」

エコナが感嘆の溜息を吐く程、エルフは美人しか存在していない…

近くに居たエルフがアルル達の事に気が付いた。

「キヤーー！！人間よー！！攫われてしまっわー！！！」

エルフの少女が悲鳴を上げて腰を抜かす。

「攫ったりしないよ。触ったりはするかもしれないけど」

リユカは腰を抜かした少女エルフに近付き、優しく立たせてながら話す。

周囲を見渡すと、他のエルフ達は皆逃げてしまった様で、村内を静寂が包んでいる。

立たせてもらった少女エルフも、慌ててその場から逃げ出してしまった…

「やれやれ…『人間より強大な魔力を有する恐ろしい存在』ね…人間見ただけで、ビビって逃げ出しちゃったけど…どうなの？」

この世界の常識で生きてきたアルル達には、リユカの言い様には反感を憶えてしまう。

しかし、現実を垣間見てしまった為、反論する事も出来ない。ただ、

「そう…言われ続けてたんだよ！」

と、子供じみた言い訳しか出来ないでいる。

「ま、いいや…そんな事より、女王様を捜しましょうか。一番でっかい建物に居るのがそうだよ。きっと…」

村内の一番大きな建物の前まで辿り着いたアルル達。

門には10人の戦士風エルフが、剣を構えて進入を阻んでいる。

「あ！間違はなく此処にお偉いさんが居るよ！」

リユカは誰が見ても分かる事を言いながら、戦士エルフ達に近付いて行く。

「ちょっと女王様にお話があるから、退いてくれない？」

「人間が何の様だ!？」

戦士エルフのリーダー格の美女が、リュカの喉元に剣を這わせ言い放つ。

「あれ？君が女王様？」

隊長エルフの瞳を真っ直ぐ見つめながら話すリュカ。

「ち、違う！み、見れば分かるだろう…女王様はこの奥にいらっしやる」

リュカに見つめられ、顔を真っ赤にする隊長エルフ。

「僕達、女王様に大切なお話があつて来たんだ。お願いだよ、お目通りをさせてくれないかなあ？個人的には君ともお話をしたいんだけどね…」

喉元に剣が這つてる事を気にもせず、隊長エルフの腰を抱き寄せ瞳を近付ける。

隊長エルフはどうする事も出来ないでいる…剣で喉を切り裂く事も、押しのけて逃げ出す事も、大声で助けを呼ぶ事も…ただリュカの瞳に心を奪われる…一人の女でしかない。

『人間達よ…入室を許可します…』

何処からともなく声が響く。

「……………どうぞ…お通り下さい……………ただ、女王様に無礼な事はするでないぞ!!」

女王の声を聞いた隊長エルフは、リュカの喉元に這わせてあつた剣を放し、通行を促す。

「ありがとう。君、名前は？」

優しく訪ねるリュカ。

「わ、私は…カリィだ…」

思わず答えるカリィ…リュカの瞳から目を離す事が出来ないでいる。

「うん。僕は、リュカ。よろしくね」

そう言つと、カリィの頬へ優しくキスをするリュカ。

最早、ただの恋する乙女であるカリィを尻目に、女王の元へと歩み

出すアルル達。

カリーはこの先どうなるのだろうか…

アルル達は謁見の間の様な空間に辿り着く。

間の前には玉座に座る美しきエルフが一人…

「貴女が女王様でしょうか？」

「如何にも…私がエルフの女王です。………して、人間…何用で此処まで参った？私達は、人間なんぞとは関わり合いになりたくない！サッサと出て行ってほしいのだが…」

不機嫌な表情の女王は不機嫌な口調で吐き捨てる。

「此処より東に位置する、ノアニールと言う村の呪いを解いて頂きたく、お願いに参りました。」

アルルは可能な限り恭しく嘆願する。

「ならぬ！その村の男は我が娘を誑かし、エルフの秘宝『夢見るルビー』を盗ませた！断じて許す事は出来ぬ！」

「夢見るルビー！？そんな事は一言も言ってなかったな？あのジジイ…」

「あの…私達はノアニールの村人に…難を逃れた村人に頼まれただけなんです…些か情報不足ですので、何が起きたのかをお教え頂けないでしょうか？」

「主等に教えて何になる？娘を連れ戻せるのか？」

「はい。可能な限り尽力致します。」

「……………」

目を瞑り考えるエルフの女王…

「いいでしょう…」

エルフの女王は静かに目を開くと、10年前に起きた出来事を静かに語り出した。

・
・

・
エルフの女王の娘『アン』は、ある日森に迷い込んだ人間の青年に惚れてしまい、毎日の様に村を抜け出し、人間の青年と逢い引きをする様になる。

その事に気付いた女王はアンに『二度と人間の青年と会う事は許さぬ』と言われ、悲観に暮れてしまった。

しかしアンは、エルフの秘宝を持ち出し、村から出て行ってしまった。

「……………質問が一つ」

女王が話し終わるとリュカが手を上げ質問をする。

「何か…？」

「何故、娘の恋路に反対したんですか？」

「人間なんぞ粗野で度し難い生き物！そんな生物との愛など許せる訳がないであらう！」

「それはエルフ族の総意？」

「そうです！エルフ族は人間と違い、同族同士で睚み合い殺し合うなどと言う事はしない！比べものにならぬ程高等な存在です！」

「つまりアンタは、母親であることより、女王である事を選んだ訳だ。見た目美人だが、最低なブスだな！」

リュカは苦々しく言い放ち、唾を吐き捨てた。

「な、何だと…」

エルフの女王は怒りに体を震わせる。

「アンタの娘だって人間という存在については聞いていただろう。」

それでも人間に恋をしてしまったんだ！だがアンタは、その人間がどういう人物か知ろうともしてない。もし娘の幸せを願うのなら、娘の恋の手助けをしても良かった！『人間』という全てではなく、その『人間の青年』個人の事を調べ、娘を幸せにする事が出来るか確認すれば良かったんだ。反対するのはその後でも間に合う。」

「そ、それは…しかし、人間は多くの残虐行為を行ってきた歴史が

ある！」

「それは全人類が行った行為ではない！過去の…極めて少数の人々が犯した過ちだ！じゃあ聞くが…今まさに産まれたばかりの赤ん坊が居るとする。その子は極悪人か！？」

「……いや…違う……だが、何れ悪事を働くかもしれない！」

「じゃあ、その赤ん坊がこの村に迷い込んだらどうする？殺すか？言っておくが、赤ん坊を村から追い出したらすぐに死ぬぞ。殺したと同じ事だぞ！」

「産まれたばかりの赤子ならば、我らの手で育てる。赤子に罪はない！」

「では、その子が成長しアンタの娘と恋に落ちたらどうする？人間だから反対するか？何れ大悪人になるかもしれないから拒絶するか？」

「我らが育てなのだ！悪事を起こす訳がない！反対などせん！！」
エルフの女王は立ち上がり、リュカをきつく睨み付ける。

「その通りだ！育ってきた環境によって人間は変わる。優しい人に他人には優しくするようにと言われ育ったのなら、他者を傷つける様な事はしない人物になる。その青年だってそうかもしれないだろう！それを調べもしないで決めつけた！エルフの女王という立場だから、娘が人間と仲良くする事を許す訳にいなかったんだ！アンタは娘より、自分が大切だったんだ！」

リュカの言葉に力無く腰を下ろす女王…

「……貴様に…何が…分かる……」

「分かるさ！僕にも娘が居る。もう嫁いってしまったけど…初めて僕の前に彼氏を連れてきた時は、ぶん殴ってやろうかと思ったけど、娘が…ポピーが悲しむからやめた。でも、やっぱり腹立つからね、ちよつと嫌がらせをしてやったんだ。そしたら、その男真に受けちゃってね…本当に危険な地域に赴いて、魔族を倒して来ちゃったんだ。そして娘との仲を認めて貰う為ならって、僕にまで攻撃してきた…これ程ポピーの事愛してるなら、これ以上反対できないでしょ

う…結婚式では淒く幸せそうだったよ」

リュカは嬉しそうに娘の事を語る。

それを見た女王に言葉は無い…

ただ俯き、出て行くようにと手で合図する

エルフの宮殿を後にしたアルル達は、エルフの隠れ里の出口を目指し歩き出す。

「リュカさんの娘さんて、もう結婚してたんだ」

「何だウルフ？僕の娘を狙ってるのか？まだ居るぞ！」

「別にそんなんじゃないよ！ただ、どんな人なのかなと思って…」

「うん。外見は母親似でものっそい美人だよ。性格は僕に似てるってよく言われる。あそこまではっちゃんけてはいないつもりだけどなあ…」

アルル達は想像をして震え上がった…

リュカの様な性格の女が居る事に…

そんな女が存在に…

儚い命、強固な愛

< エルフの隠れ里付近の森 >

「しかし探すとしても何処を探します？10年も前の事ですよ！何処か別の土地に渡ってしまっただけかもしれませんし…」

ハツキの嘆きにエコナも同調する。

「そやで！もうほっといてロマリアへ戻りましょ。そない義理を尽くす必要ないやん！」

「そんな訳いかないわ！イノックさんと女王様に約束してしまったんだから」

「うん。それに、そんな遠くには行っていないよ。この森を探せば、二人ひっそりと暮らして居るよ」

「リユカさん、この森に居るってどういう事！？何でそんな事言い切れるの？」

ウルフだけでなくアルル、ハツキ、エコナもリユカの言葉に興味を持つ。

「うん。それはね…あのジジイが言ってたじゃん。『1週間たつても戻る気配がなく、心配になり近隣の村や町を探し回った』って…しかも2ヶ月間も探したみたいだし。自分の息子の事だからね…そりゃ真剣に探したんだと思うよ。それなのに足取り一つ見つからないって事はだ…近隣の村には近付いてもいないって事だよ。なんせエルフは人間達におそれられてるからね。何処にも行く事なんて出来ないよ」

リユカの説明に納得する4人。

「ほな、この森全体を探さなアカンやん！何日かかる事やら…」

「人間が生活する以上、住処から一步も出ないで生きて行く事は出来ない。食料調達等であっちこっち歩き回ってるはずだから、そんなに大変じゃないよ」

そう言っているとリュカはサッサと森の奥へと入って行く…

実を言うとアルル達は、この森に入ってから方向感覚を無くしているのだ。

その為、リュカとはぐれると遭難してしまう恐れがある。

みんな慌ててリュカについて行く。

暫く森の中を彷徨うと、湿っぽい雰囲気醸し出す洞窟が口を開けてるのを発見した。

「さすがにこの中には居ないだろう…」

「甘いなウルフ君。あの二人は誰にも邪魔されない所に行きたいんだ！エルフはもちろん、人間さえも絶対入って来ない洞窟…完璧じゃないか！」

若者4人は不満げだが、リュカがドンドン進んで行く為、ついて行かざるを得ない…

<ノアニール西の洞窟>

此処は有り触れた洞窟だ…

湿気とカビ臭さとモンスターの気配…

テンションの低い4人を励ます為に歌うリュカ。曲目はジュー・デ・オング『魅せられて』。そして案の定4人は戦闘を強いられる。

一行は幾度も勝利を重ねながら、洞窟内を奥へと突き進む。

目の前に奇妙なモンスターが現れた。

まるでキノコのお化け…『マタンゴ』である。

3匹のマタンゴは一斉に『甘い息』を吐き、それを吸い込んだアルル達は簡単に眠り着いてしまった！リュカ以外…

「あれえ…みんなお疲れでしたか？これってピンチじゃ〜ん！」

危機感など感じていないリュカは、ドラゴンの杖でマタンゴを一掃！眠れる美少女3人と居眠り少年1人を担いで、更に奥へと進んで行く。

最初に目を覚ましたのはアルルだった…

周囲を見回すと、そこは美しい地底湖の畔…

そして少し離れた所にリュカが佇み、何かを読んでいる。

慌てて他3人を起こすアルル。

それに気付いたリュカがアルルに手紙を手渡した。かなり古い手紙だ…

その手紙には【お母様。先立つ不幸をお許し下さい。私達はエルフと人間。この世で許されぬ愛なら…せめて天国で一緒になります。

アン】と…

「これって…」

「…エルフの女王の娘…アンの最後の言葉だ…その宝箱に、ルビィと短剣…それとその手紙が入ってた…」

リュカの頬を涙が伝う…

リュカだけではない…皆、涙がこぼれ出る…

「様子を見守るだけで良かったんだ…誰でもいい、エルフでも人間でも…親が意固地に反対しなければ…そうすれば…死ぬ事なんて…」
「帰りましょ…そして女王様とイノックさんに伝えないと…」

アルル達は洞窟を後にする…沈痛な面持ちで。あのリュカですら…

<エルフの隠れ里>

アルル達は再度エルフの女王の宮殿へ赴いた。

入口にはカリーの姿がある。

「リュ、リュカ…また来たのか…もう、女王様には会わせぬぞ！」

リユカは悲しい表情のまま、懐から古びた短剣を取り出しカリーに見せる。

「これ…君のだろ…君の名前が彫ってあるよ…アンに渡したのかい？」

それは洞窟でアンの手紙と一緒に入ってあった短剣だ。

「こ、これは！？私がアン様にプレゼントした『聖なるナイフ』だ！ど、何処でこれを？」

リユカは事の顛末をカリーに話した…

「そんな！アン様が…（うつ）…アン様が…！」

カリーは短剣を抱き締め、泣き崩れた。

そしてリユカ達は女王の元へと歩み出す。

「また来たのか！？不愉快な人間め！」

不快感を露わにする女王に、アルルは夢見るルビーを差し出す。

「そ、それは！？いつたい何処でそれを？」

リユカは黙って手紙を渡した。

女王は手紙を読み始めると、体を震わせて泣き出した…

「私が認めなかったばかりに…私が…（うつうつ）…アン…ごめんなさい…アン…！」

ただ黙っていることしか出来なかった…

女王を責める事も、慰める事も出来ず…

リユカ達は目を伏せ、一緒に悲しむ事しか出来なかった…

「世話になったな人間よ…いや、リユカと申したな。カリーから聞いたぞ」

「…………ノアニールの件ですが…」

「うむ。これを持って行くが良い」

リユカは女王より、粉末の入った袋を受け取った。

「それは『目覚めの粉』よ。その粉を風に乗せてノアニールに撒けば、呪いの効果は消え去り、皆目覚めるでしょう」

「ありがとうございます」

「それと、今宵はこの村に宿泊してゆきなさい。もう夜も遅い…もてなす事はありませんが、寝床を一晚提供しましょう」

女王の突然の提案に、驚きを隠せないアルル達。

しかしリュカだけは驚いた風もなく、優しく礼を告げる。

「ありがとう。女王様」

そのリュカの一言に、顔を真っ赤に染めて女王が呟く。

「べ、別に…人間を許した訳ではありませんから！こ、今回の事への感謝の気持ちですから！」

これは、もしかしたらツンデレというヤツでしょうか？

今後のエルフ族の未来が心配です。

儚い命、強固な愛（後書き）

二人のエルフの心を魅了したリユカ！

そして夜は更けて行く…

今宵、リユカの隣で寝息を立てるのは果たして誰か！？

女の戦いが今始まる！

闘技場でモンスター同士を戦わせるより、こっちの方が面白そうだ
！

目覚め

<エルフの隠れ里>

まだ夜も明けきらぬ前に、リュカの寝ている部屋の前に集まる4人。エルフ達を刺激せぬ様、早めに村から出て行く為、身支度を調えたのだが…案の定リュカが起きてこないのだ…

「なあ…リュカはんの事や、誰が女を連れ込んだるんやないか？」

「連れ込むって…エルフしか居ないのよ！？」

「カリーって女戦士じゃないか？剣を突き付けておきながら、抱き寄せられてたぞ！」

「女王様もリュカさんの笑顔で虜になってた様に見えましたよ！」

ヒソヒソとそんな話をしていると、リュカが部屋から静かに出てきた。

「あれ？みんなどうしたの？」

すぐに扉を閉めた為、中を確認する事は出来なかった…

「リュカさん…中に誰か居るんですか？」

「……………そんな事を聞く必要がある？」

リュカは昨晚の事を教えるつもりはない様だ。

「世の中には知らなくていい事もあるんだよ。それが大人になるって事だよ。諸君！」

リュカは4人を部屋から遠ざけ、退村を促す。

エルフ族と人間との間でトラブルが起きぬ様、祈るしかないだろう…

<エルフの隠れ里近郊の森>

「ハツキ…」

リュカはエルフの隠れ里よりノアニールへと向かう道中、ハツキに

声をかける。

「はい、何ですかリユカさん？」

「これ…カリーから貰ったんだけど…ハツキが使つてよ」

そう言つて手渡されたのはアンが使用してた聖なるナイフだ。

「こ、これって！？アンさんの形見じゃ…！？」

「うん。カリーに渡したんだけど、僕等が役立てた方がアンも喜ぶからって…」

「で、ベットの中で渡されたんですか？」

「…イッテルイミガワカリマセン」

「……………」

ジト目で見つめるハツキ…

視線を合わせないリユカ…

「ふう…そうですね、アンさんの為に私が使用させてもらいます」

「ありがとうございます」

「でもナイフだと攻撃範囲が狭いから、素早く動ける様に特訓しないと…」

「うん。僕も手伝うよ」

リユカの笑顔と一緒に特訓と言うご褒美に、昨晚の事などどうでもよくなってしまうハツキだった。

<ノアニール>

アルル達が村へ入ると、奥の方からイノック老人が小走りで近付いてくる。

「おお…アルル殿！エルフの女王には会えましたか？」

側に立っていたリユカとは視線を合わせず、アルルとだけ話を進める。

「はい。呪いを解く方法入手にも成功しました…」

「なんと…！ありがとうございます！では、早速…」

「アンタ、自分の息子の行方はどうでもいいのか？」

冷たい口調でリュカが問う。

「いいわけない！……だが、探しようがないのだ……足取り一つ掴めなかったのだから……」

イノック老人は怒りと悲しみの目で、リュカを睨み付ける。

「何処か別の地で……二人幸せに暮らしていると思い、祈るしかないだろう……」

「僕は足取りを見つけました……」

「……！本当ですか！？そ、それで何処に……！？」

イノック老人は驚き、縋る様な表情でリュカに詰め寄る。

「……………」

だがリュカは答えない……アルル達も答える事が出来ない。

「……………ま、まさか……………」

「……………この世じゃ添い遂げられないと悟り、二人天国で幸せになる為に……………」

「そ、そんな……（うつうつ）！」

リュカの言葉を聞き、両手で顔を覆い泣き崩れるイノック老人。

「……貴方が……せめて貴方だけでも味方をすれば……父親である貴方が、自分を犠牲にしても守ってやれば……」

リュカは懷から、目覚めの粉を取り出し空中へばらまく。

粉は風になり、村の隅々まで行き渡る。

すると、其処彼処から人々の声が聞こえだした！

「ジイさん……村の人達への説明はアンタに任せる。呪いで10年間眠り続けた事を、伝えるか伝えないかは………伝えれば、きっと皆怒るだろう！呪われる原因を造ったアンタの息子と……そしてアンタ自身も……責められるだろう……」

リュカ達は泣き崩れるイノック老人を尻目に、その場を立ち去った。心身共に疲れた為、今日は宿屋で休み、ロマリアへ帰るのは明日にすることに……

村中の人々が、荒れ放題の村を見て驚いている…

そんな中、アルル達は宿屋へ赴く。

数日前に勝手に宿泊した為、アルルは少し後ろめたそうだ。

「あ、あの…5人一晩なんですが…大丈夫ですか？」

「もちろんだとも！5人で25ゴールド。…ただ少し待っていてくれ！何故だか客室が荒れててね…急いで片づけるので時間をください。」

「ぜ、全然大丈夫です！どうぞごゆつくり！！」

客室を荒らしたのは、数日前のアルル達…

そんな事知らない店主は、慌てて2階へ行き部屋を整える。

その間、アルル達はロビーの椅子に座り待つ事に…

其処には一人の若い女性が物思いに耽っていた…

無論リユカがスルーするわけもなく、口説き出す。

「お嬢さん、何か悩み事ですか？僕がご相談に乗りますが…ベットの
の中で」

この男、何時もこんなストーリーレートなんですかね？

「ありがとう…私、失恋しちゃった…」

女性は少し微笑むと、悩み事を語り始めた。ベットの中にはないけれど…

「昨晚、あんなに愛し合ったのに…今朝起きたら居なくなってたの、
彼…」

「けしからんヤツだ！貴女のような美しい女性を、黙って捨てるなんて！何てヤツですか！？出会ったらデコピンしてやりますよ！」

「ふふふ…面白いのね、アナタ。」

「ありがとう。僕の名前はリユカ。ベットの中では、また違った僕をお披露目出来ますが…」

「私はジェシカ。そして私を捨てた男はオルテガ…もし、出会った
らデコピンをよろしくね」

「あの…も、もう一度…男性の名前を…」

アルルが立ち上がり、ジェシカへと詰め寄る。

「え！？ええ…オ、オルテガよ…そ、それが何か…」

「ねえアルル…もしかして…あ「それ以上言わないで！」

ハツキの言葉を遮り、考え込むアルル。

オルテガ…それは10年前に魔王バラモス討伐の為に、アリアハンから一人で旅立ち、そして散った男…しかもアルルの父親の名前である！

アリアハン出身のハツキとウルフは、その事を分かっている為、アルルを気遣い心配そうに見守っている。

そんな事知らないリユカは、ジェシカを口説き相部屋の了承を得ていた。

「皆さん、お待たせしました。お部屋のご用意が整いました。どうぞおくつろぎください」

リユカのナンパが成功したタイミングで、店主が2階から下りてきた。

リユカだけが女性を伴い、部屋へと消えて行く…

暗い表情で部屋に入るアルル…

他の3人は、戸惑いながらも旅の疲れを癒す為、各々の部屋へと入って行く。

翌朝、あまり眠れなかったアルルは、皆が起きる前にベットから起き、村内を散歩する事に…

其処には、既に起きていたリユカが小鳥達と戯れている。

父親と関係を持った女性と、昨晚関係を持った憧れの男性…リユカ。アルルの気持ちは複雑になり、リユカにどの様に接していいのか分からない。

「おはようアルル。どうしたの、元気ないね？何か相談事があるなら聞くよ」

「……………オルテガとは…私の父なんです…」

「オルテガ？誰？」

さすがにイラつくアルル。

「昨日出会った、ジェシカさんが言ってた男です！」

「……………ああ！ジェシカさんの元彼ね！へー、さすがアルルのパパさん。趣味が良いね！」

「（イラ）趣味がどうかじゃないです！父は私やお母さんを置いて、旅だったんですよ！それなのにこんな所で浮気をして…」

「イヤイヤ、浮気じゃないよ。ジェシカさんから聞いた話では、モンスターに襲われている所を、オルテガさんに助けられて、惚れちやったジェシカさんが、お礼と称してベットで迫ったんだって。まあ…もちろん、据え膳食わねばってヤツで、やる事はやったみたいだけど…」

「同じですよ！お母さんを裏切ってるじゃないですか！」

「男なんて、そんなもんだよ…」

「父はお母さんの事など愛してないという事ですか？リュカさんもそうなんですか！？」

アルルは泣いていた。

リュカは優しくアルルを抱き寄せ、その場に座ると膝の上にアルルを座らせ宥めながら話す。

「アルルのお父さんは、お母さんの事を愛してるよ。」

「何でそんな事言えるんですか！」

「大好きな人の為に、世界を救う旅に一人で出たんだ！お母さんの事を愛していなければ出来ないよ。」

「じゃあどうして…」

「男ってのはね、欲求を止められないもんなんだ！人によって処理の方法が違うだけで、皆同じなんだよ。」

「処理の方法？」

「そ！自分の手を使う人もいれば、僕みたいに女性をナンパする人も居る」

「そんな身勝手な！」

「身勝手だねえ…僕もビアンカの事を愛してるよ。この世で一番…でも、身勝手なんだ…困ったねえ」

「男の人はズルイです！そんな人、嫌いです！身勝手じゃない真面目な人が私は好きです。」

「うん…じゃあアルルには、僕の息子がお似合いかな？」

「ティミーさんですか？真面目なんですか？」

「うん。父親とは正反対！」

「そうですか…会って見たいですねえ…」

「そうだね、年頃もアルルと同じくらいだし…バカが付くぐらい真面目だからね。もてるのに、摘み食いしようとしらないんだ。男としてどうなの？って思うよ…」

「……（スー）…（スー）……」

気付くとリュカの腕の中で寝息をたてるアルル。

少しだが心の蟠りが解け、安心してしまったのだろう。

リュカが優しく抱き上げ、宿屋までアルルを運ぶ…

どうやら今日の出立は、遅くなりそうだ…

継承

<ロマリア>

「おお！さすがは勇者一行！よくぞ取り戻してくれた！」

アルル達はロマリア城へ入るなり、謁見の間まで急かされる様に通され、今は王様よりお褒めの言葉を賜っている。

「お褒め頂き恐縮です。しかしカンダタ本人は逃してしまいました……申し訳ございません」

「よいよい……女性を助ける為に已むなしと聞いておる！」

「随分と詳しいツスね！？見てたんですか？」

リュカの不躰な質問に、王は笑って答える。

家臣の方々は不愉快極まりない顔をしている。

「お主等が助けた女性から聞いたのだ。窓の外に縛り吊されてた者だ。憶えておるだろ？」

「お元気ですか？」

「うむ。お主に感謝しておったぞ！」

リュカは嬉しそうに頷く。

「……褒美の件だが……話をまとめると、リュカ……お主一人の力で、なし得た様に思えるのだが……」

「そんな事ないツス！みんなの協力でなし得た事ツス！」

「殊勝な事だ。だが、お主が盗賊団を壊滅させたと、報告がきておるのだよ！」

「その通りです陛下！私達は一緒にシャンパニーの塔まで行きましたが、何も出来ずにいました！彼一人の功績です！」

珍しくリュカが辟易している事に、アルル達は少し楽しんでいる。

「ではリュカに褒美を取らせよう！」

ロマリア王は嬉しそうに立ち上がり宣言する。

「リュカ！お主にロマリア王国の王位を譲ろうぞ！」

「……………どうしてもダメか？」

「しつこいおっさんだな！王になって良い事なんか一つもない！」
最早誰も言葉遣いを注意しない。

「……………仕方ない…諦めるとしようか…だがリュカよ！何時でも代わってやるぞ！自由に飽きたら何時でも来い！」

ロマリア王はにこやかに玉座へ戻る。

「飽きないよ！」

「では、他に何か欲しい物はあるか？何も褒美をやらない訳にはいかぬのだが…」

ロマリア王の問いに少し考えたリュカは、アルルを見て問いかける。
「アルルは何か欲しい物ある？」

急に権利を譲られ戸惑うアルル。

「……………そ、そうですね……………あの、可能なら船を頂けますか？今後の旅に必要なと思うので…」

「ふむ…船か…我が国にも無いわけでは無いのだが…我が国の船では、お主等の役には立たんよ」

ロマリア王の言い分では…

船、1隻で大海原へ出ても、海の強いモンスターに沈められるのが落ちである。

船団を組んで航海するのなら何とかなるが、1隻では船自体が丈夫でないと、意味がないと言う。

「そう…ですか…」

「ただ『ポルトガ』なら、造船技術が発達しておる故、強固な船を造る事が出来るであろう」

「ではポルトガへの通行許可を頂けますか！？」

「それには及ばぬ！もう既にお主等はフリーパスだ！ロマリアから何処へ行こうが、私に許可を取り付ける必要はない。だが困った事に、ポルトガへ通じる関所なんだが…」

齒切れの悪いロマリア王。

「何か問題でも……」

「……………鍵が無い……」

「は？」

「モンスターが蔓延っていたのでな……関所の門を閉めてしまったのだが……鍵を無くした……まあ、モンスターの行き来を阻害する為に閉めた訳だから、いいかなと思って合い鍵を造って無い……壊されると困るのだ。鍵を開ける事が出来たのなら、自由に通行してくれ！」
結局、アルル達はロマリア内フリーパスの権利以外、何も貰えなかった。

むしろ問題が山積して行く事に、リユカ以外が頭を悩ます……

「どうしましょう？」

宿屋へ戻った一行は、いつもの様にリユカの部屋で作戦会議を行っていた。

「ナジミの塔で貰った、盗賊の鍵じゃ開かないかな？」

「やってみてもいいけど、開かなかった時の為に別の方法も考えとかないと……」

ウルフの提案にアルルは難色を示す。

関所を閉める様な鍵だ。

簡単な造りの訳が無い。

「じゃあ、どうすんのや！」

「……」

誰も何も思いつかない。

堪らずアルルはリユカに頼る事に……

「リユカさんは……何か打開策がありますか？」

「うん。『魔法の鍵』を探しに行こうよ。『イシス』って国にあるらしいから」

「何でそんな情報を持つてんだよ！」

愚問である。

「ジェシカさんから聞いた。ジェシカさんは元彼から聞いたらしい。その元彼が探しに行つたみたいだよ」

アルルの顔を歪る…

「また女かよ…」

皆、呆れ顔だが他に何も思いつかない為、リュカの情報を頼りにイシスへと向かう事となる。

先ずは『アツサラム』へ向けて…

別世界より？

<ラインハット>

ラインハット謁見の間に、特使として訪れたティミーが傳えている。

「おいティミー！そんな他人行儀に畏まるなよ！」

「いえ、そう言うわけには参りません。私はグランバニアの特使として参りましたので…」

相変わらずバカ真面目である。

「アンタそんなだから彼女が出来ないのよ！もう少し柔らかくならないよ。男が堅いのは一部分だけでいいのよ！」

《この女のこう言う所が嫌いだ！公式の場という事を理解してるのか！？》

イラつきポピーを睨むティミー。

楽しそうに微笑むポピー。

この二人は双子の兄妹である！これでも…

「まあまあ…それでティミー君、どのような用件でいらしたのですか？」

国王のデールが場をまとめる。

・
・
・

「相変わらずトラブルに巻き込まれる男だな…」

ヘンリーが笑いながら感想を述べる。

「ヘンリー様！笑い事ではございません！我が国は現在、国内に敵が多数存在します。ラインハットのご助力が無ければ、我がグランバニアは窮地に陥ります」

「貴族から税金を取るからだ。貴族ってのは気位だけは高いからな」
ヘンリーの笑いは止まらない。

「ぶつ殺しちゃえばよかったのよ！拳兵した時に…」

ポピーが笑顔で物騒な事を言う。

「まあ…そう言うわけにもいかなかったのだろう…」

さすがに引くヘンリー…

「（ゴホン）分かりました。我がラインハットは可能な限りグランバニアをご支援致します」

デールの力強い言葉に、ひとまずは安堵するティミー…

そして表情を切り替え、もう一つの難題に立ち向かう覚悟を決める！

「さて…ラインハットのご協力を得た所で、ポピーに頼みがあるのだが！」

ティミーの言葉にポピーの瞳が輝く！

「何？何？何？何？何？愛しのお兄様が私にお願いって？『童貞捨てたいから体かせ』とか言っちゃう！？やだ、ちょく楽しみ！！」

イライラするティミー、ワクワクするポピー。

拳を握り締め、怒りを我慢しつつ話を続ける。

「父さんを助け出すのに、協力をしてほしいんだ！」

少しキレ気味のティミー。

「あゝ！？何言ってるの？わざわざ改まって言う事？言われなくても協力するつもりよ私！この後サントローズへ行くんでしょ！？そしてマーサお祖母様と一緒にグランバニアに戻るんでしょ！？私はそのつもりよ」

完全にキレルポピー。

「あ…ああ、よろしくお願いしたい…」

「あのねえティミー…アンタだけのお父さんじゃないのよ。私にとっても大切なお父さんのよ！」

「うん。ごめんね…じゃあ、早速サントローズへ行こう！」

少し自分の妹を侮っていた事に、反省する…

「ちよつと待って！着替えてくるから！…あ！私の着替え…見たい？」

「本気でどうでもいいから、早くしてくれ！」

やはりポピーはポピーだ…

ティミーはもう一人のトラブルメーカーと共に、サントローズへと向かう…胃に穴が空く思いをしながら。

<サントローズ>

「あらティミー君、いらっしやい。残念ながらリユリユは出かけてるわよ」

ティミーとポピーはサントローズに着くなり、シスター・フレアに出会いリユリユ不在を聞かされる。

「残念ねえ…ティミー！もう帰る？」

《コイツ、弟だったら絶対殴ってるのに！》

「今日はマーサ様に用がありました…ご在宅ですか？」

「ええ、マーサ様なら…」

ティミーはシスター・フレアと別れ、サンチョ夫妻と共に暮らす祖母の元へ赴く。

「ティミー様、ポピー様！お久しぶりです。……………ティミー様…リユリユちゃんならご不在ですよ？」

サンチョがティミーの来村を不思議そうにしている。

「何で僕がサントローズへ来ると、リユリユ目当てと思われるの！？」

「事実だからでしょ！」

ティミーの憤慨に爆笑しながら答えるポピー…

「あら？ティミー、ポピー…いらっしやい。……………でもリユリユちゃんは今村に居ないのよ…」

そこに2階から下りてきたマーサも、リユリユ不在を伝える。

「……………いえ、今日はマーサ様に用がありました…」

「まあ、私に…何かしら…リユカの行動なら止められませんかよ」

実の母親にこんな事を言わせるとは…

「実は…」

・
・
・

「あの子は飽きの来ない人生をおくってますね…」

これまでの状況を聞いたマーサは呆れるばかり…

「それで私の異界へのゲートを開ける力が必要と…しかし、私の力は魔界の門を開ける力…今回役に立つかどうか…」

困り顔で答えるマーサ。

「父さんが言っていました！『行動する前に諦めるのは愚か者だ』と…ともかくグランバニアへ来て頂けませんか？あの不思議な本を調べれば、何か分かるかもしれません」

「行動する前に諦めるのは愚か者ですか…良い言葉ですね」

「お祖母様。お父さんは女性を口説く時に、その言葉をよく使っていましたわ。『口説くだけ口説いて断られたら、諦めればいい。行動する前に諦めるのは愚か者だ』って？」

「なるほど…あの子らしいですね…」

「因みにティミーは、行動する前に諦めるのは愚か者よ。口説こうともしない！」

ポピーの言葉に辟易しているティミーが答える。

「リユリユは妹だ！口説く気は無い！当たり前だろ！」

「あらあら…別にリユリユの事ではないのですが…やっぱり忘れられないんでしょう？」

「こら、ポピー！ティミーが可哀想でしょ！あんまりからかわないの！」

「はい。ところでリユリユは何処へ行ったの？」

ティミーも行方が気になる様で、マーサの答えを待っている。

「確か…リユカに教わって、ルラフェンって町に行ってみた…何か特殊な魔法を憶える為だった…」

「特殊な魔法…？何かしらね！？」

「父さんは色んな事知ってるなあ…ルラフェンかあ…どんな所だろ？」

「……………さあ、こうしてても始まらないわよ！グランバニアへ行きましょう。困った息子を連れ戻す為に！」

ティミーはポピーとマーサを連れ、ポピーのルーラでグランバニアへと戻る。

リユリユに会えなかった事を、非常に残念に思いながら…

別世界より？（後書き）

みんなのアイドル、ポピー様が久しく登場！！

こんな素敵な妹が居て、ティミー君が羨ましいですよね！

ところで…『ついにアッサラームだ！はっちゃけフェスティバル！

！』を期待されていた方にはごめんなさい。

楽しみは次話に持ち越します。

お友達

<ロマリア〜アッサラム>

アッサラムへと続く大草原に響く歌声…『カントリーロード』を
気持ちよさそうに歌うリユカ。

モンスターの一団に襲われ、戦闘を余儀なくされるアルル達…

「ふう…俺達結構強くなってきたよな！」

戦闘を終え、ハツキのホイミで傷を癒しながらウルフが感想を述べる。

「そうね…戦闘回数だけはい多いもんね…そりゃ強くもなるわよ！」

アルルは、まだ歌い続けているリユカに嫌味を言ったが、気にする様子は微塵もない。

「あ、ある意味リユカさんのお陰で強くなってるんですね！…私達の為に歌ってるのかな？」

自分の歌に浸っているリユカを4人が見つめる…

「…そんなわけないだろ！？」

ウルフの意見が満場一致で可決された。

<アッサラム>

まだ夕方と呼ぶには早い時間、アルル達はアッサラムへと辿り着いた。

一行は何時もの様に宿を確保し、町へと繰り出し旅に必要な物を購入する。

幾つかの店を見回ったアルル達は、1軒の店で足を止める…

「おお、私の友達！お待ちしておりました！売っている物を見てい

って下さい！」

店内へ入った途端、度を超えた愛想の良さで話しかけてくる店主…

「と、友達って…私達の事？」

「そうです、そうです！皆さん、私の友達！」

「イエーイ！僕達友達！友達価格で売ってちょうだい！」

「はい、私と貴方、友達！買っていつてちょうだい！！」

店主と一緒にしゃぐリュカ。

そんな中、売っている物を見るアルル達。

「結構良い物売ってるわね…」

「この杖…『魔道士の杖』か！？」

ウルフは1本の杖を手に驚いている。

「おお！さすが友達、お目が高い！24000ゴールドです。お買になりますよね！」

「に、24000ゴールド！？買えるわけ無いだろ！」

「おお、お客さん。とても買い物上手。私、参ってしまいます。では、12000ゴールドに致しましょう。これならいいでしょう？」

「おいおい、いきなり半額かよ！」

リュカが小声で突っ込む。

「それだつて高いよ！」

「おお、これ以上まけると、私大損します！でも貴方友達！では、6000ゴールドに致しましょう。これならいいですか？」

「おお、友達！僕達にはこの杖が必要。友達を救うと思って、もっと安くしてえ！」

リュカが調子に乗って値切り出す。

「おお、貴方酷い人！私に首吊れと言いますか？分かりました。では、3000ゴールドに致しましょう。これならいいでしょう。」

当初の8分の1に値さがった魔道士の杖：

「おお、僕達モンスターと戦うのに、この杖が必要！それなのにこんな高値で売るなんて！アナタこそ僕達に死ねと言いますか！？」
リュカが楽しそうに値切り続ける。

「そ、そんなつもりは…わ、分かりました…1500ゴールドで…
どうでしょう？…こ、これ以上は安く出来ませんよ！」

店主の口調が変わり、表情も引きつっている。

「おいおい！僕達友達だろ！アナタが最初に言い出した…友達だったら、もつと安く出来るよな！？」

リユカは満面の笑みで店主の肩を抱く…ただ、声のトーンが笑って無い！

「し、しかし…私にも生活が…」

「僕達には旅が待っている！旅先では危険が付き物だ！折角出会えた友達だが、今日で最後かもしれない。そんな友達を見捨てるなよ！…安くできないのなら、その『マジカルスカート』を、オマケにつけてよ。いいよね！」

「……………そ、それは……………」

「と・も・だ・ち…だろ…！」

半ば脅しである。

「分かりました…魔道士の杖とマジカルスカート…1500ゴールドです…」

店主が力無く承諾する…しかしリユカの攻撃は止まらない！

「おお、友達！ありがとう、さすが友達！じゃあ、はい。1500

ゴールド！杖とスカート3着貰って行くよ！」

「さ、3着！！？な、何で3着も！？」

「だって女の子3人居るんだよ。3着必要でしょ！じゃあ友達！またね〜」

「に、2度と来るな…！！！」

店主の悲痛な叫びが店内に木霊する。

「ほらウルフ。大事に使えよ！」

店から少し離れた所で、先程の戦利品をみんなに配るリユカ。

「しょ、商人顔負けの値切りっぷりやな！店のおっちゃんに同情し

てもうたわ！」

「魔道士の杖とマジカルスカート3着を、鉄の槍より安く買っなんて……リユカさん買い物上手！」

「最初に吹っ掛けてきたのはあっちだ！」

「それにしても、やっぱ凄いなリユカさんは！勉強になるよ」

羨望の眼差しでリユカを見るウルフ。

「さあ、取り敢えず買い物は済んだでしょ？一旦宿屋へ戻ろうよ。お腹空いちちゃった」

アルル達はリユカの希望で宿屋へ戻る。

少女3人は、リユカがくれたスカートを穿き、宿屋1階のレストランへ現れた。

「ど、どうですか……似合います？」

少し恥ずかしそうにハツキが訪ねる。

「このスカート、防御力があるのね……この先、重宝するわ！」

照れ隠しをしながらアルルが喜ぶ。

「戦闘で激しく動いたら、パンチラし放題だな……リユカはん、それが目当てなん？」

リユカの前で一回転してエコナが可愛く微笑む。

「うん。僕の思った通り、みんな可愛い！値切って良かった……！」

「俺の所にはスカート見せに来ないのは何故？」

ウルフの寂しそうな問い掛けにハツキが答える。

「だってアンタ、購入に何も寄与してないでしょ！リユカさんが買ってくれたんだから！」

「出だしは俺の魔道士の杖からだろ！」

「まあまあ……そんなに拗ねるなよウルフ。後で一緒に『ベリードン』見に行こうよ！」

「……リユカさん、ベリードンって何ですか？」

「うん！アッサラムの劇場でね、毎晩裸同然のねーちゃんが踊るんだって！さつき町の人に聞いたんだ！だからさっさと夕飯済ませ

て、町に繰り出さないと！」

「何や！ダンスならウチがリュカはんの上で、幾らでも踊るねんではない！」

「うん。それはまた今度楽しませてもらうよ」

本当にさつさと夕飯を済ませたリュカは、ウルフを伴い町へと繰り出す。

アルルとエコナは夜間営業の武器屋に行く為、男二人のお目付役はハツキになった。

「あー…楽しみだなー！どんなダンスなんだろう？ブルンブルン揺れちゃうかな！？」

「もう！リュカさんエッチすぎです！ウルフもそう言うのが好きなの？エロガキね！」

ウルフは何も言えず黙り込む…

幼い頃から面倒を見てくれたハツキには、やはり逆らえないのだ。

「あーら、素敵なお兄さん！ねえ、パフパフしましよ。いいでしょ？」

リュカ達は不意に女性に声をかけられた。

「…パフパフ…？」

怪訝そうなりユカ。

「…パフパフって何ですか？」

本気で知らない純情ウルフ。

「きつと如何わしい事よ。相手しちゃダメ！」

決めつけるハツキ。

リュカは女性の胸を注視して呟く。

「それで出来んの？足りなくね？」

「な！！失礼ね！」

「あの、パフパフって何ですか？」

「あら、坊やは興味あるの？お姉さんが優しく教えてあげるから、

私の部屋に來ない？」

女性はウルフを妖しく誘う…

「よしウルフ！何事も経験だ！行ってこいよ！僕はベリーダンスを堪能してくるから！」

そう言うところユカはその場を立ち去ってしまった…もちろんハツキも一緒に…

そして残されたウルフは、女性に手を引かれ彼女の部屋まで付いて行く事に…

大人の階段を登りきる事が出来るだろうか！？

ウルフに幸せは訪れるのだろうか！？

砂漠

<アッサラム>

まだ日も昇りきらない早朝、ささやかな事件が発覚した。

昨晚の体験を追い払うが如く、一人で魔法の特訓をしていたウルフが、特訓を終わらせ割り当てられた自室に戻ろうと宿屋の廊下を歩いていると、リュカの部屋から1人の女性が気配を消しながら出てきた。

「あれハツキ？何やってんの？…そこ…リュカさんの部屋だろ…え！？ま、まさか…うぐっ！」

リュカの部屋からこっそり出てきたのを、ウルフに目撃されたハツキは、慌ててウルフの口を手で覆い喋れない様に羽交い締めにする。そしてそのまま宿屋を出て、人気のない物陰へと連れ込む！

「…つぶは！ハ、ハツキ…お前もしかしてリュカさんと…」

ハツキの怪力から逃れたウルフが、ハツキに問いかける…

「そ、そうよ…だって…リュカさん…格好いいんだもの…」

俯きモジモジするハツキの顔は、薄暗くてもハツキり分かるくらい真っ赤だ。

「あ、あのね…みんなには…黙っててほしいの…」

「何で？」

「だって…その…恥ずかしいし…」

「俺は構わないけど…すぐにバレると思うけどね…」

「い、いいの！それより、アンタこそ昨日はどうだったのよ！」

ともかく話題を変えたくて、ウルフの昨晚の事を聞き出そうとするハツキ。

「……………頼む…聞かないでくれ…お願いだ…」

どうやらトラウマになる様な事があったらしく、ウルフは半泣きで頼み込む……いったい何が？

<砂漠>

アルル達一行は灼熱の砂漠を突き進む。

サンサンと輝く太陽の光を遮る物は何もない…

ただ、いつの間にも買ったのか、リュカが青く大きなパラソルを差し日陰を作り出している以外は…

しかしパラソルで作られた日陰に居ても、体力の消耗は著しく、リュカに合わせて歩くだけで精一杯の様だ！……………リュカ以外！

リュカは異様にテンションが高く、パラソルを上下に揺らして歌っている。

歌うは『東京音頭』……………ツバメ好きか？

だが誰も文句を言わない…この暑さで文句を言う気力も無くなっているのだ。

小さなオアシスを見つけた一行は、側に生えてある木を利用して簡易テントを作り、休める場所を確保する。

「ちよつと早いけど、今日はここで一晩明かすか…」

木陰でへたばるアルル達の為に、野営の準備を黙々とこなすリュカ。簡易食を手早く作り、皆を起こして食事をさせる。

「リュカさん…ありがとう…でもリュカさんは元気ですね」

「ほんま…何でそんなに元気なの？」

「僕は寒いのが苦手なんだけど、暑いのは平気なんだ！女性が薄着になるしね！それに以前、砂漠より暑いダンジョンを探検した事があるんだ！あそこは凄かったよ！」

昔を語り調子に乗ってきたリュカは、元の世界での冒険談を話し始める。

殺された父の遺志で、伝説の勇者を捜す冒険談を…

攫われた母を助ける為、伝説の勇者を探す…その為に天空の武具を見つけ手に入れる事…そして天空の盾を手に入れる為に挑んだダンジョンの事…

「ほなりユカはんは、盾を手に入れる為にフローラっちゅう娘と結婚したんか？」

「ううん。フローラとは結婚してないよ。滝の洞窟へ向かう前に再会した、ビアンカって言う幼馴染みと結婚したんだ！」

「でもフローラさんと結婚しないと、天空の盾が手に入らないんですよね！？それじゃお父様の遺志を果たせないじゃないですか！？」
「アルルも父の遺志を継いで、バラモス討伐に旅立った為、思わず過敏に反応する。」

「うん。そうだね…でもね、ビアンカが言ったんだ『リユカは沢山不幸な目に遭ってきたから、もう幸せになるべきだ』って…確かにフローラと結婚すれば幸せになったかもしれない…莫大な財産、巨大な権力、美しい妻…そして父の遺言の天空の盾」

「じゃ何で結婚しなかったんだよ！」

「簡単だよウルフ…僕を最も幸せに出来るのはビアンカだけだからね！」

皆がリユカの話を噛みしめている…納得できる部分も出来ない部分も…

「じゃあ…結局、伝説の勇者様は見つからなかったのですか？」

そんなハツキの質問を受け、リユカが笑い出した。

「あはははは！それがさ、笑っちゃうんだけど…もし僕が真面目に勇者様捜しを続けていたら、永遠に見つける事は出来なかったんだよ！」

皆、不思議そうな顔でリユカを見続ける。

「僕が自己の欲望に負けてビアンカを選んだからこそ、勇者様と出会えたんだ！」

「ど、どういうことや？」

「なんと！伝説の勇者様は………僕の息子なのさ！あはははは、ち

よゝつけるゝ！勇者を見つける為に…天空の盾を手に入れる為に、フローラと結婚してたら、伝説の勇者は誕生しなかったんだ！『伝説の勇者なんかどうでもいい！ビアンカと結婚できれば、世界なんてどうでもいい！』って結論に達したから勇者に出会えるなんて…何なのこの嫌がらせ？だから僕は神なんて信じないんだ！」

リユカという男の人となり、皆がそれぞれ驚いている。特にエコナにとっては…

金儲けを夢見ているエコナ…何れは大きな権力を手中に入れたいたいと思っているエコナには…

「ウチには考えられへん！金と権力を手に入れた後に、愛人にすればええやん！それで全てが手に入るやん！」

「なあリユカはん…こんな事言うたら怒るかもしれへんけど…金と権力を手にした後で愛人にすれば良かったんとちゃう？奥さんもリユカはんの事好きなんやし、問題無かったと思うんやけど？」

人は誰しも、自分の思考の範囲内でしか物事を計る事は出来ない。エコナもまた人である。

「うゝん…出来なくは無かったと思うけど…」

「なんや、煮え切らんない！」

「……………心は…どうなつてただろうね？」

「……………心？」「……………」

アルル達が一斉にハモる。

「僕はビアンカの心も愛してるんだ。でもビアンカを選ばなかったら、彼女の心はどうなつてただろう？その後で『一番愛してるのはビアンカだ』と言っても、愛より金や権力を選んだ僕の事を、心から愛してくれるだろうか？」

リユカは怒るところか、優しく問いかけてきた。

「…そ、そうは言うても、全てを手に入れるなんてムリやん！金、権力、美女…それに伝説の勇者！こんだけ手に入れば十分やん！」

「全然十分じゃないよ…美女の…ビアンカの心が手に入らなければ…」

エコナの瞳を見つめ、悲しそうに語るリュカ…

「逆に言えば、ビアンカと彼女の心が手に入れば、その方が十分満足なんだ！他の物は…まあ、何とかなるでしょ！？」

そんな満面の笑みで妻の事を語るリュカ…そして話は、惚気話へと発展して行く。

ウルフにはともかく、少女3人には苦痛となる時間だった！

ハツキの後日談だが…

『エツチの時の話まで、する必要は無いと思います！』

……あの男、何考えてるんだ！？

砂漠（後書き）

いったいウルフはどのような体験をしたんでしょうかねえ？
きっと素敵な青春の1ページになったのでしょねえ！

砂漠の王国、砂漠の女王

<イシス>

イシス：其処は大きなオアシスの側に造られた砂漠の町。町の奥には大きな城がそびえ立っている。

アルル達が到着したのは夕刻だった：

リユカ以外、疲れ果ててはいたが宿を確保すると、町へ出て様子を伺う事に…

「魔法の鍵の事を知っている人が居れば良いけど…」
そんなアルルの不安はすぐに解消される事となる。

曰く、「魔法の鍵？ああ！それなら此処より北の『ピラミッド』に保管されてるらしいよ」

曰く、「『ピラミッド』に入るのなら、女王様の許可が必要ね！勝手に入ったら、墓荒らしとして拘まりますよ」

曰く、「『ピラミッド』には、様々なトラップが仕掛けられている！頼まれたって入りたくないね！」

曰く、「女王様の美しさには、モンスターをもひれ伏すであろう！」
等々…

大まかに情報を仕入れたアルル達は、宿屋へ戻り作戦会議を行う事に。

此処は宿屋のアルルの部屋。

リユカ以外が集まり明日の予定を話し合う。

「これで、目的地が定まったわね！」

「そうですね。では、明日朝一で女王様へ謁見を致しましょう。許可を戴かないとピラミッドへは入れませんから」

「な、なあ…リュカさんは置いていった方が良くないか？」

ウルフが小声で話す。

「そやで！町でも美しいって評判の女王やで！下手したら、下手するやん！」

皆、見つめ合い頷く。

美女で女王…最悪の組み合わせだ。

どう転んでも碌な事にはならないだろう…

（コンコン）

「みんな、明日の予定は決まった？」

其処へ現れるリュカ。

実に良いタイミングである。

「あ！実はリュカさん、あ「僕、明日は町を探索してるよ」

リュカに留守番を頼もうとしたが、リュカの方から残留を表明してきた。

「え！？そう…リュカさん…残るのね…」

「うん。だから4人で謁見してきてよ」

アルル達にとっては願ってもない事だ。

そして宿屋から出て行くリュカ…

いったい何処へ行くのやら…

翌朝、リュカとの鍛錬を終えたアルル達は、女王へ謁見する為に城へと赴く。

城へ着き、係の衛兵に用件を伝えると、

「只今、女王様は別件にて政務中である！暫し此処で待つ様、仰せかったです」

と、待ち惚けを喰らう事に……しかもかなりの時間。

一方リュカは砂漠の美人を求めて、町中を彷徨っている。

《砂漠の国の女王様：きつとアイシスみたいな女だろう…：だいたいイシスとアイシスって似てるんだよね！いくら美人でも、近付きたく無い女だ！町でナンパしてる方が100倍マシだ！》

「ねえねえお嬢さん！僕とエッチしない！？」

「何だコラ！？俺の女房に何の様だ！」

「おおっと、ごめんなさ〜い！素敵な旦那が居るとは知らなかったので〜じゃあね〜」

そんな感じで表通りから裏通りへと…

そんな時！

「きゃ〜！！誰かタスケテー！変な男に攫われるうー！」

すぐ近くで美女（リュカ曰く）の悲鳴が聞こえた！

新たな出会いを求めてリュカがダツシュで赴くと…

其処には、紛う方なき美少女が3人の男に腕を引つ張られ、攫われそうになっている現場だった！

「コラー！お父さんにナンパの仕方も習わなかったのか！？女の子を口説くなら、もっと優しく口説くもんなんだぞ！パパとママに聞いてみる！」

いきなり現れ意味の分からない事を叫ぶ男に、戸惑った男達…

男達が戸惑った隙に、襲われてた少女はリュカの方に逃げ寄り抱き付いた。

「どなたかは存じませぬが、助けて下さいまし！あのぶ男達が『へっへっへっ、ねーちゃんあっちの物陰で良い事してやんぜ！』って言うって、イヤらしい手で私を触るんですう」

「な、何勝手な事を「うるさい！痛い目に遭いたくなければ、今すぐ失せる！僕は暴力事が嫌いなんだ！」

女性を庇う様に立ち上がるリュカ。

「ちい！仕方ない…大事にするわけじゃないな…おい！手早く始末するぞ！」

3人の男のリーダー格が、他2人に指示を出し、リュカに襲いかかる！

「ちょ、女の子1人に大袈裟じゃない？何、殺気立ってんだよオマエら！もしかして地雷踏んじやったのかな、僕…」

3人の攻撃を余裕で躲しつつ少女を守るリュカ。

自身の技量には多少の自信があつた男達は、全く掠りもしない現状に焦りだした！

「メラミ」

そして焦つた男の1人が思わず魔法を唱える！

「バギ」

しかしリュカのバギで四散され実力の差を思い知る事に…

さらにリュカは素早く3人の懷に飛び込み、強烈な一撃を食らわせる！

メラミを放つてから、一瞬の出来事だつた…

「凄い…あの3人を一瞬で…」

少女が驚き呟く。

3人を気絶させたリュカは、少女の元へ近付くと、

「やあ…改めましてこんにちは。僕の名前はリュカです。エッチする事を前提に、一緒にお茶でもどうですか？」

こんな状況でふざけたナンパをするリュカに、更に驚く少女…しかし直ぐにそれが笑いに変わる！

今までこんな男に出会つた事がない…

不思議そうな顔で微笑むリュカを見つめ少女が…

「よろしくねリュカ。私はレイチエル。何処かお茶の美味しいお店、知ってるの？」

こうして2人はその場を離れて行く…

気絶する男3人を置き去りにして…

一方アルル達は、半日待たされ続けたのにも拘わらず、『申し訳ありませんが、本日の謁見は出来ません。また後日お越し下さい』と追い返された。

入城した時は、朝日が眩しかったのに、今では夕日が輝いている…

「ああ…何にもしてないのに疲れたわ…」

「本当だな…」

「でもリュカはんを置いてきて正解やったね！」

「ええ！侍女の方々も美人揃いでしたもんね…」

「一緒だったら、もっと疲れてたよ…きつと…」

みんな溜息と共に宿屋へと戻って行く…

リュカに今日1日は無駄であった事を伝え、明日の予定を伝えねばならない。

今日と同じではあるのだが…

命中率（前書き）

今回は出だしからです！

あの野郎…

初っぱなからやらかしてます！

命中率

<イシス>

「な…何やってんだよ!」

アルル達は宿屋へ戻り、状況説明をする為リユカの部屋に訪れた。ドアを開け入室すると、中ではリユカと見知らぬ少女（レイチエル）が閨事の真っ最中であつた!

「全く!こつちは大変だつたんだぞ!1日待ち惚けで!」

「あはははは。そんなに怒るなよお。……で、女王様には会えたのかな?」

数分後、ともかく行為を止めさせ、二人が服を着るのを待つてから状況の報告に入る。

「会えなかったわ!忙しいんだつて!リユカさんと同じで!」

トゲのある発言をするアルル。

「へー、大変だつたね」

しかし全く堪えてない。

「貴女達は女王に会つて何をしたいの?」

不意にレイチエルが会話に割り込んできた。

「何や!?急に会話に割り込んで!だいたいアンタ何なんや!?」

「ああ、ごめんね。私レイチエル!今日危ない所をリユカに助けられたの!それで、今さっきお礼をしていたところよ」

「何でリユカさんはそうやってトラブルに遭遇するの…凄い命中率よね!」

「何でだろ?面倒事嫌いなんだけどね?」

笑っているリユカに呆れるアルル。

「で、何で女王に会いたいなの!」

「私達、バラモス討伐の旅に出ているんです。その為にピラミッド

にあると言われる、魔法の鍵を入手したいんですけど……」

「なるほど…ピラミッドへ入る許可を、女王に貰いに行ったのね…勝手に入っちゃえば良かったのに…」

「アホか！そんな事したら墓荒らしとして、手配されてまうやん！ウチらは魔法の鍵が欲しいだけや！墓、荒らしたい訳とちゃう！」
エコナはジェラシーから、レイチエルにきつく言い放つ。

「私、城には顔が利くんです！何だったら今から謁見できる様、計らいましょうか？」

「ほ、本当ですか！？しかも今からでも良いんですか？」

「ええ！リュカがどうしてもって言っなら、私頑張っちゃうなあ」
そう言い、リュカの首に腕を回し甘えるレイチエル。

それを見て、一気に苛つくアルル・ハツキ・エコナ！

そんな女性陣に怯えるウルフ。

「じゃあレイチエル…お願いするよ」

リュカは気にもせず、レイチエルにキスをする…

砂漠に血の雨が降るのは、時間の問題だろうか…？

リュカと腕を組み、イチャイチャしながら城内を歩くレイチエル。
そんなレイチエルを見て、啞然とする人々…皆、言葉を失っている様だ。

そんな状況を感じ取る余裕のない少女3人。

そんな少女3人のイラつきに、怯える少年が1人。

この奇妙な男女6人は、誰にも止められることなく、イシス城謁見の間へと入室して行く。

謁見の間に入ると、既に幾人かの側近等が待ち構えており、皆驚いた様子でリュカ達を見ている。

その中にはリュカが昼間に気絶させた3人の男も含まれている。

「ただいまー！久しぶりの城下は凄く楽しかったわ！」

レイチエルはリュカの腕から離れると、軽い口調で今日の感想を語り、玉座へと腰を下ろした。

「女王様！お戯れが過ぎますぞ！」

側近の一人：多分、最も位の高い大臣がレイチエルに向けて苦言を呈す。

「偶にはいいじゃない！」

それを軽い口調で流すレイチエル。

「ちょーじよ、女王様！？貴方、イシスの女王だったの！？」

「口を慎まんか！」

アルルの発言に激怒する側近達：

「黙れりなさい！この者達は良いのです！私は身分を秘匿して、この者達と接していたのです！」

「し、しかし！」

レイチエルが許しを出しても、不満を口にする側近：恰好からして軍人であろう。

「女王がいつて言っただから、黙れよハゲ！」

「な、何だとお！こ、この無礼者め！」

爽やかな笑顔で無礼な物言いのリュカに、ブチ切れる軍人！腰から剣を抜き放ち、リュカに襲いかかってくる！

「ブレイザー、お止めなさい！」

ブレイザーと呼ばれた軍事は、リュカまであと3メートルの所で止まる。

そして苦々しい表情のまま、剣を鞘に戻し下がった。

「ごめんなさい、皆さん。ちょっと気が短いよ、彼！」

今にも血管がキレそうな程、顔を赤くしているブレイザー：

「茹で蛸みたいだね」

リュカとレイチエルが揃って笑い転げる！

アルル達は傳き、胃痛に悩まされている！

「さて…十分笑ったところで、本題に入りましょうか！…確か、ピラミッド探索の許可が欲しいんですね！？」

「はい。バラモス討伐の為に、ピラミッドに保管されている、魔法の鍵が必要です。どうか我々に許可を…」

恭しく嘆願するアルル。

「……………条件が1つあります！」

宿屋での気さくさが微塵もなくなったアルルを見て、意地悪をしたくなったレイチエルは、素直に許可を出さない。

「条件とは何でございましょう」

「ふふっ…簡単よ…リユカが私と結婚する事よ！」

一人傳いてないリユカを見つめ、国家の行く末が左右されそうな条件を提示するレイチエル！

「な！！そんな横暴な！」

「せや！そんな認めへん！」

急に立ち上がり、レイチエルに向けて苦情をぶつけるハツキとエコナ。

「ハツキ、エコナ、黙って！！」

「…うっ！」

アルルに怒鳴られ、再度傳く二人。

「女王様…その条件は、私の一存では答えられません…当人の意志を尊重致します」

「……………なるほど…では、リユカ。私と結婚して下さいますか？」

先程までは冗談半分の表情だったが、今は真面目な表情で求婚するレイチエル…本気でリユカの答えを待っている。

「えー？ヤダよ！」

この場にいた誰もが驚く発言をするリユカ…

「き、貴様ー！！女王様の気持ちを踏みにじるとは…「うっさい！

黙れよ！お前には関係ないだろうが、ハゲ！」

また一人激怒するブレイザー！（国家の重鎮だし関係なくは無いいだけだね）

頭皮の事をかなり気にしているらしく、先程よりも勢いを増してリユカに襲いかかる！

レイチエルも求婚を断られたショックで、少し呆然としていた為、今回は止める事が出来なかった！

ブレイザーはリユカに向けて剣を振り下ろす！

しかしリユカは、表情一つ変えることなく、右手の親指と人差し指で摘み受け止めた！

「オイオイ…女王の前で流血沙汰は拙いんでない？」

「ブ、ブレイザー！退きなさい…私の客ですよ！」

しかし退かないブレイザー…いや、退けないのだ…全体重をかけて剣を引き戻そうとしているが、リユカの手から剣が離れない！

「リユ、リユカさん！手を放してあげて下さい！」

気が付いたアルルがリユカに告げる。

「あ！そうか…」

リユカは慌てて手（指）を放す…すると、ブレイザーが勢い良く後方へ吹っ飛んだ！

何やら何処かで見た様な光景だ…

凄まじい勢いで壁に叩き付けられたブレイザーは、そのまま気を失い壁際に崩れ落ちた。

「…やっと静かになったね」

リユカの一言に、騒ぎ出しそうになった側近達を手で制し、穏やかにリユカへと語りかけるレイチエル。

「リユカ…何故、私と結婚してはくれないのですか？私と結婚すれば、イシスの王になれるのですよ？」

「ヤダよ！王様になったら自由に冒険出来ないじゃん！」

「……………では、ピラミッドへの探索許可は認めません！…困るのではないかしら？魔法の鍵が手に入らないと」

レイチエルは少し意固地になっていた。

「僕は困らないよ。ただ、バラモスを倒せなくなるだけだし！」

そう…バラモスが倒されないと困るのは、この世界の人々だ…

イシスの女王として例外ではない。

「……………」

「……………」

リユカとレイチエルは見つめ合いながら沈黙を続ける。

「ふふふ…分かりました。諦めます！あゝあ…私、本気でリユカの事好きになっちゃったのに…」

「ごめんね。初めから敵わぬ恋だったんだよ…僕、奥さん居るし！」

「えゝ！？奥さんが居るのに私の事ナンパしたの？」

謁見の間に側近達のざわめきが広がる！

それに比例して、アルル達の胃の穴も広がる様だ！

アルル達が胃潰瘍で倒れる前に、ピラミッド探索の許可を貰えるのだろうか？

命中率（後書き）

女王に手を出しといて、無事に城から出れるんですかね？
リュカさんの未来が心配です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6325x/>

ドラゴンクエスト? そして現実へ...

2011年11月25日22時49分発行